

を自分でするのが当然でムいいます。どうか妾をさういふ事にして義人さんを助けて下さいまし。』

阿辰は感窮まつて物も言へず、源藏は飛上つてボンと手を拍つた。

『あゝ感心だ。俺はお嬢さんの心を聞いて、親の死んだにもこぼした事無い涙をこぼしやした。』

『妾は自分がどうなつても、義人様さへ助ければ、妾が助かつたと同じですから。どうぞさう遊ばして下さいまし。』

堪らなく悲しくなつて、よゝと泣き沈むだ。

『妾も眞實に、始めて心から泣かされました。』と、阿辰も襦袢の袖で目を拭いて居る。

『姐さん達のやうな、揃ひも揃つた好い女に、死ぬ程心配をさせる彼の義人といふ人は、よく／＼好い月日の下に生れたんだなあ。』

源藏は太い溜息を吹き上げながら力一杯唸り上げた。

\*

\*

\*

\*

『阿辰様、宅の旦那に旨く話を持ちかけたら、さういふ事なら、何とか工夫をしやう。夫にや之から義人を水戸へ差立てる事にするから、其時途中で鶏籠を破つてくれといふのでムいいます。途中の辛領にや俺が付きますから、いさつて言ふ時にや、俺が鶏籠を捨て逃げ出します、其後で破つておくんなさい。場所は宅の旦那の迷惑にならぬやう、次の郡代御支配へ入つて、山の中にして下さい。』

取つて返して来た仲間の源藏は鳴海との打合せを細々と話して聞かせた。

『だけどさうなると汝さんは。』

『俺なんぞは軽い者です、其場かぎり逐電してしまへば、夫でお了ひでさあね。』

案するより生むが易く、當つて碎けて見れば、案外鳴海の解りが早く、金で話が附く段取になつたのだ

『義人様は御領分の人達に取つちや、萬兩でも替へ難いんですから、一三百兩の端た金で救ひ出せりや、只より安い位ですぜ。』

人間の身體を金で買へるもので無いとすれば、千萬金も惜くはないけれど、今は五十兩の工面さへ附かない悲しい身の上で有る。

『難有う、汝さんのお蔭で、其處まで話が出来たから、此上はお金の工面なんだけれどね。』

阿辰は首をかしげて、急場の才覺を案じ勞らつた。

『處で工合のいゝ事には、水戸下市の者で、俺の知人に逢つた處、其人のいふにや、誰か汝の知つてる處で、大處のお嬢さんか何かで、今都合の悪くなつてる人は有るまいかと聞くんですよ。』

『へー可笑しな尋ね者だね。』

「處が左様で無いんで。……俺も變だと思つて聞いた處、下市の旭屋と言やあ、御領分に鳴り響いた大町人でさあ、大賀の越中屋を百軒寄せたつて敵やしない位で。」

「あゝ旭屋なら、三十五萬石のお金御用達さ。」

お袖も旭屋の名は能く知つて居た。日本中の金持と言へば、三井、住友、鴻池、夫れと太刀打が出る程の大家だといふのが、水戸領分の誇りだつたのだ。

「其旭屋で、末のお嬢さんの附人を捜して居るんで、只の奉公人では不可ねへ、香花茶から遊藝はコロリンシャンまで出来なければといふんで、中々捜しても無いさうですよ。夫を聞いたから俺は此お嬢様の話をしたのさ。すると奴さん大變喜んで是非お目にかゝりたいと言ふもんだから、外へ待たして置きましたよ。」

「マア幸ひな話しだけれど、夫で先方で下さるものは。」

「三年の約束で二百兩といふんで、即金ですぜ、奴さん金の袋を擔いで歩いて居ます。大黒様見たやうなんで。」

お袖は身體中が蕩けるやうに嬉しくなつた。寧ろ夢では無いかと思ふので有る。

所詮身體から生み出すならば、卑しい勤め奉公に、清い肌身を汚さねばならぬのである。さうしたら心の底に良人と仰ぐ義人に濟まず、又代々野上の大盡として久慈河筋に鳴り響いた下岡の家名を、此時いざといふ時に、劍に伏して一身を清うする外はないと、此話の始まる時から、堅く決心したので有る。

お袖は男の爲に死を極めて居たが、案外春の風が吹いて、堅い氷が他愛もなく解け出したので有るから、思はず嬉しい溜息を吐いた。渡る世間に鬼は無く、女夜叉といはれる阿辰さへも、自分に力を添へるやうになつて呉れたのは、祈る神佛の加護だと、我と身を抱きかゝへて、心からの感謝を捧げた。

\* \* \*

「あゝお袖様、妾は貴女に此様な事をさせて、眞實に濟ないのでういます。義人さんに何と言つて、顔向けが出来まじやう。」

阿辰は破れ疊に身を平伏して悶え悲しんだ。

「いゝへ其様な事は無いません、貴女の事では無し、妾の事なのですもの、夫に勤め奉公と言つても賤しい君傾城の流れに汚れるのではなく、立派な旭屋さんへ行つて、お娘御さんのお附きをするので

「います。少つとも恥しい事はありません。」

別れとも無い阿辰よりも、お袖の方が反つて気が進んで居た。

「夫やさうですとも、誰に聞かしたつて、あつたものでさあ。」

源藏は側から合槌を打つてそやし立てる。

「さうして義人さんを救やあ立派な貞女、御褒美が出たつて可い位でさあ。」

「いや全く感心なものだね。」と、旭屋に頼まれて、お付きの人を捜すといふ、源藏の知合藤助は、膝を打つて感に堪へる。

「定めし旭屋さんでも喜ぶ事でしょう。俺もお蔭で手功になりますよ。」

「ぢや藤助さん、宜しく此お嬢さんをお願いしますよ。途中間違ひのないやうにね。」

阿辰は漸く涙を拭いた。

「大丈夫ですとも、通し駕籠で、疎勿の無いやうにやります。……只お氣の毒なのは、此方が急ぐものだから、義人さんにお逢はせしてからといふ事が出来ないんで。」

お袖は夫ばかりが、泣いても泣き盡されぬ悲しみだけれど、自分の身體を賣つて、戀しき人が助かると思ふと、力強い喜びが咬り立つ。

「叱ッ、義人さんの事は極内なんですよ。折角鳴海さんの方の手を放れても、里見に嗅ぎ附けられた

ら大變。彼奴にかゝつたら、幾ら義人さんだつて、逃げ了ふせる事は出来やしませんよ。」

阿辰は白い両手を舉げて、上から押伏せるやうに止めた。

「ぢやお嬢さん。」と、藤助が促す外には、昇夫が大きな雁首の煙管で煙草の吸ひ飽きをして居た。

「ではお別れでいます。」

今更悲しさが込み上げて来て、お袖は聲を曇らした。

「では義人さんを此方へ取返したら、直に沙汰をしますから、安心しておいでなさいまし。而して水が變りますから、氣を付けて患らつて下さいませよ。」

悲しく立上るお袖を、悲しく送り出した阿辰は柱に凭れて顔を背向けた。

梅の花の散つて行くのを、櫻の花がいちらしく見送るので有る。一人は駕籠に乗つて見返れば、一人は門へ出て見送る。行くも止まるも只一人の男の爲で、二人の美人の魂は、義人の爲に千萬無量の悲痛な戀に泣くので有る。

冷たい垂はバタリと下りた。昇夫は難無く肩を入れた。憂き人の心は、蜿蜒打つばかり微塵に碎け行く。

「では御機嫌よく。」

「貴女も何卒御無事で。」

駕籠の中には、絲のやうな泣き聲が聞こえた。

見送る駕籠はよう／＼遠く霞んで行く。

「阿辰様」と、後に残つた源藏は、ツク／＼感心するやうに、妖艶無比に色めく顔を見上げた。

「妾の顔にお祭が通りやしまし、何を見るんだね。」

「でも姐さんが、あんまり腕が凄いかんさ。」

「妾の腕の凄いのを、今知つたのかい。」

阿辰は少し反身になつて、低く誇りやかに笑つた。

「可哀さうに、彼娘さんは何にも知らずに行つたんですよ。」

「其代り之から面白い思ひをして暮せるから、反つてい／＼ぢやないか。」

哀れむべきお袖は、終に毒婦の爲に謀られ、清淨無垢の玉の身體を汚れの底に投げ落さうとするので有る。

\*

\*

\*

\*

「眞實に妾は胸が透くやうにサバ／＼したよ。どうして好い子になつて、一杯食はせやうといふには相手が伶俐者だけ、並大抵の骨折ぢやなかつたよ。」

宅の中へ入つて、息繼の一杯を源藏についてやりながら、阿辰は凄婉な瘦身の身體を、媚めかしく斜にくねらしつゝ、莞爾と笑つて居る。

「全く姐さんの凄腕にや驚きやしたよ。彼娘さんは何處迄も姐さんを親切者だと思つてるんですからね。……種々の出方を使つて、捕まつても居ない義人を、召捕られたやうに思はせるのは、凄腕筋書でさあね。」

源藏の言葉によると、義人は鳴海の手に落ちたのではない。假令傷を負つたにしても、甚八に助けられて、人知れぬ隠れ家に落つき、自由の空氣を吸つて居るので有る。夫を運盡きて召捕られたやうに言ひもし思はせもしたのは、飽まで惨い悪戯で、悉皆悪魔の毒火を噴くと同じで有る。如何に賢いお袖でも、懐中育ちの娘として、騙されるやうに膳立てされた上は、到底騙されずには居ないので有る。

「一體姐さんは、彼塵お嬢様育ちの娘つ子を、何で邪魔にするんですえ。眞逆に身の代金が苗といふばかりぢや有りませすまい。」

「夫や左様さね。妾や別にお金に困つちや居ないんだからね。」

「ぢや何で凄腕芝居を打つたんですね。」

阿辰は源藏に酌を添へながら、自分でもグイと飲み乾した。

「夫や汝さん、彼女は妾の戀敵なんだもの。彼娘が有るばかりに妾はどんな恥をかいたか知れやしない。」  
「へー彼嬖素人の娘つ子に姐さんが遅れを取るなんて、馬鹿々々しい骨頂ですね。全體相手の男といふのは、どんな人なんですね。」

「彼の無名の義人が左様なんだよ。」

阿辰は流石に幾らか顔を打ち赧らめて、羞かしさうに苦笑ひした。

「これや驚いたね。俺や又突轉ばしの若旦那のやうな優男かと思ひやしたね。……姐さんの藥喰ひなりや。」

「其嬖者ぢや、妾にや食ひ足りないよ。」

「恐れ入つたものだ。可なり悪物ぐひですぜ。」

「蓼くふ蟲も好きくなら仕方が無いやね。」

「姐さん、お手柔かに願ひやすぜ。」

「マアお聞きよ。妾や汝さんの言ふ通り、悪物ぐひかも知れないのさ。言はゞ敵同様の彼人を、どうかして見たいと思ふのは……すると汝さんは義人さんには、彼お袖といふ娘が附いて居るんでしやう其爲に妾は義人さんをどうにもならないんですよ、妾に鼻も引つかけやしない。だからお袖を旨く騙

して、女囀の藤助さんに賣つて、憂い勤め奉公をさして、思ひ知らせてやるのさ。義人さんにも面當なりや、彼女にも仇を復す、此位溜飲の下る事は有りやしないやね。」

阿辰はお袖の爲に、危き命を救はれて居る恩の代りに、惨い仇を報ひやうとするのは、逆も人間の事とは思はれぬ程、残忍酷薄の恐ろしさに、源藏も呆れる程驚かされた。

「ぢや其積りで、俺の方へも御祝儀を頂戴したいもんで。」

長らく阿辰の相棒になつて居たら、どんな目を見るか知れないから、足許の明るい内と、逃仕度を始めたので有る。

「御催促にや及ばないやね。」

氣前よく二十五兩の切餅二つ、ぼんと投出した。然も夫は先刻請取つたお袖の身の代金で、清淨無垢の玉の肌、惱亂の龜裂を、無慚に入らせる汚れの代償で有る。

「夫やね、和女さんは立派なお嬢さんにや違ひないんですよ。此方も實を言やあ、夫が附け目で、大金を出して抱へたんですよ。今になつて、約束が違ふの何のと言はれちや、女囀の藤助さん始め妾が困つちまふぢや無いか。困つた娘だねえ。」

水戸下市の太田屋といふ遊女屋の二階で、遣手のお勘は、物凄顔に苦笑ひを滲ませつゝ、騙されて風塵の底に落込んで来たお袖の側に、じり寄つた。

憐むべくいじらしき室の梅は、春知り始めた花の蕾を寒風に曝されて、堅く結ぶ重ねの花片を、無理強に破られねばならぬ程、無慚の傷ましき悲運に押し附けられて行く。

「水戸は濱街道随一の大町人、日本に幾番と指折數へられる旭屋の娘の附人になる積りのが、駕籠から下されて見ると、思ひもかけぬ遊女屋だつたが、夫も遣手が来て話をする迄は、騙されたとは思はなかつた。」

「藤助さんのおはなしでは、水戸の旭屋さんのお嬢さんの御世話をする筈で参つたので、ムいませるか。」

刻々息が縮まつて行くやうな、胸苦しい豫感に驚き怯えつゝ、ワナ／＼と身體が慄え始めた。

「申戯言つちや不可ない、幾ら旭屋さんが日本一の大町人だつて、お嬢さんのお附に二百兩の三百兩のと言つて、小判の雨を降らせるものが有るものかね。馬鹿／＼しい。」

然し物の相場を知らぬお嬢様育ちが、お勘に取つては珍重の美味で、恚ういふ上品な玉は、鐘と太鼓で探しても有るものではない、聽ては太田屋のお職として、大きな鴨を引かけるのだと、内心北叟笑した。

「ではどうか藤助さんにお逢はせなすつて下さいまし。」

「夫や不可ないよ。彼人は直に土浦から取手の方へかけて、買出しに行つて了つたもの。」

藤助を引つ張つて来ては、酢だの蒟蒻だのと話しが面倒になつて来るのだ。

「では彼の方の歸つておいでになるまで、お待ちなすつて下さいまし。」

「馬鹿お言ひな、大金の出た和女さん一日遅れれば遅れるだけ、金利の損だけでも大抵ぢや無いよ。」

……お客の取り方や、娼妓の手管を妾が教へて上げるから、早く商業に出ておくれな。」

お勘は口が酸くなる程苛々する思ひにじらされた。

「どうぞ藤助さんの歸る迄、夫に妾は約束をした良人が有るので、ムいませぬから、身を汚すと、其人に濟みませぬ。」

「何だつて、飛んでもない事を言やがる。巫山戯やがると承知しないぞ。」

お勘は長煙管を邪慳に叩いて、血相變へて立上つた。

「オイ茂平どん、一寸来て手を貸しておくれ。此阿魔志太いんだから。」

茂平と呼ばれた下品な大男は、得たり賢しと、恐い鬚面を目に角立て、入つて来た。

「お勘さん、和女は佛性だから不可ねへ。俺の責め方は違ふぞ。阿魔逆さに釣るして、血を絞りに出してくれんだ。」

茂平は突如お袖の横顔に無慚の一撃を呉た。

『アレ何をなさるのです。』

仆れかゝるのを片手を支いて危ふく支へつゝも屹となつた。

『何だ此阿魔ツ、生意氣だ、そんな事を言つて前借を踏まれたんぢや、稼業がなるもんか。旦那が歸つて来なさらねへ中に、一責責めずにや置かねへ。』

驚いて逃げんとするのを、起しも立てず押へ付け、お勘と二人して、グル／＼巻に柱に縛り附けた。

黒髪は蓬と亂れて、鮮かに白い横顔にふりかゝり、雨を帯びた凄婉の梨花の花は、たわ／＼に颯れて、見る／＼碎け散らんとする危急に瀕した。さうして外の娼妓達は、人の責められるのを、いゝ見物の氣になつて障子の隙へ覗きに來る。

\*

\*

\*

\*

あはれ野上小町と言はれ、下岡源太夫の娘として、一揆騒動の渦巻く中に立交つた烈婦では有るが龍も雲を失つては、風雨を捲き起す力も無い。妙なる女の身の悲しさは、色里の俘虜となつて、卑しき下賤女の筈に析檻され、芳醇なる美玉の身體を、石瓦と碎かねばならぬので有る。道理も事理も、

只馬の耳に念佛とより通らない。

『サア手前、之でも伝と言はねへのかい。』

お勘は煙管を振上げて、ピシリピシリと軟かい撫肩を打つた。其責苦の痛さは、肉を碎いて、骨に龜裂するばかりだが、お袖は流石に齒を食ひしばつて、聲も立てずに藻掻き苦しむ。

『しぶとい阿魔だ。見かけに寄らねへぞ。』

茂平は大きな手で、お袖の髻を一掴みにすると、グツと我目前に引仰むけた。髻のやうな茂平の下品な髻面と、玲瓏たるお袖の花の顔とは、咫尺の間には是非なく對ひ合つた。

遠山の翠罩むる眉の色めき、鮮かなる目の、怨みの露を含む朧たけさ、其の美しく淨らかなる顔の薄手の肌理が、人間の物とも思はれぬ婢娟さに、流石の茂平も思はず躊躇つた。

『オイ茂平どん、滅多な事をしてくれちや不可ないよ。賣物なんだから、顔へ傷でも附けちや。』  
『うん大丈夫だ。……これ丈責めたら可いぢやないか。旦那が歸つてから左様言はふぜ。慈悲深い旦那だから、歸つて来て叱られると、此方が詰らねへ目を見るぜ。』

茂平は俄に軟化した。お袖の美の威權有る輝きに、魂を有頂天に飛ばしたらしい。

『何だ、汝さん嫌に意氣地がないね。……旦那が慈悲深いから、猶更旦那に世話を焼かせないやうにして上げなけりやならないよ。』

お勘は何處までも責めて責め抜いて、早く言ふ事を聞かせなければ、自分の役目も立たなければ、權威も頽ると思ひ込むのだ。

「手前位強情の女は有りやしない。手前などを等閑にしちや、外の妓の見せしめにならんだ。」

お勘は責道具の焼煙管で、打つやら突くやら、嵩に懸かつて責め立てる、其苦しさに身を悶えれば悶える程、繩は邪慳に食ひ入つて、笞の煙管は女の淺ましい苦しみを責めさいなむ。お袖は終に堪らなくなつて、悲痛の呻きを洩らした。

「態ア見ろ。サア苦しきや往生して、之から勤めをすと言ひなさい。」

胸もあらば、脛もあらはの無慚な姿が、打たれ叩かれるよりも恥かしい苦惱だつた。

「サア、まだ伝と言はねえのか。此上は裸にして海老責めにしなきやならねえんだ。」

お勘が立ち懸らうとする時、黙つて後から其肩を押へ附けたものが有る。夫が立たうとする鼻を押されたので、調子を外して、お勘はベタリと尻居になつた。

「誰奴だ。巫山戯た眞似しやがるのは。」

仆れながらに怒鳴り返ると、其後にヌツと立つて居るのは、主人の大田屋佐吉だつた。

「アツ旦那様ですかい。」

お勘は奥驚敗亡して、目をまじまじしながら、

「茂平どん、旦那が入らしつたら入らしつたと早く教へりや可いんだよ。」

「お勘、茂平なんぞは、疾くに居やあしねえよ。……和女は家の爲を思つて懲戒をするのか知らないが、怪我でもさせたらどうする。常平生俺が左様言つてるぢやねえか、困つた女だな。」

「だつて旦那、大金で抱へた女が、勤めに出来ぬと言やがるんですよ。」

「夫でもトツクリと話しや解らう。」

佐吉はどんな女かと思つて、息も絶えぐに挫折れたお袖の顔を覗き込むと、呀と言つて思はず側へ寄つた。

「もし、野上のお嬢様ぢや有りませんか、私は先年親旦那様にお世話になつた佐吉でいますよ。……

……お勘何して居るんだ、早く繩を解け、巫山戯た事をしやがつて、俺は稼業こそ牛馬に劣るが、之でも人間の血はあるんだぜ。」

\* \* \*

「あゝお嬢様だ。之や飛んだ事でございました。どうして遊女などにお成んなさるお積りになつたのでござります。……これお勘、何だつて手前はお嬢様を折檻したんだ、お嬢様に爪かけ程の疵が附いて見ろ、俺は罰が當つて、どんな事になるか知れねへ。飛んだ女だ。」



佐吉に叱り附けられて、お勘は何とも言へぬ佛頂面を膨らして、澁々繩を解いた。

「サア手前お嬢様の前へ手を突いて、お詫をしろ。」

「だつて旦那、妾はそんな事た知りませんよ。大金を出して抱へた女だから。」

「大金を出しや猶更大切にしなきやならねへ。手前が主人の爲と思つてする事は、皆不爲なんだ……」

俺の家ぢや外の女郎屋と違つて、娼妓に酷い事をしねへのが自慢なんだ。其奴を手前方圖もねへ事をしやがる。」

繩を解いて、佐吉が忙て介抱すると、お袖は漸く人心地が附いた。

「汝さんは、先に家に來て居た佐吉でしたかへ。眞實に好い處で逢ひました。妾は人買の藤助とか言ふ人に騙されて、下市の旭屋へ連れて行くと云ふので、眞實にして來ると、此方の家へ騙して連れて來られたのでムいますよ。」

太田屋の主人が、此上にも鬼のやうな人かと魔えたに反し、父が救つた事の有る佐吉だつたので、お袖は地獄で佛の思ひだつた。

「あの藤助の奴が、太い奴だ。宜しうムいやす、後でお氣の済むやうにお詫を致させます。何しろ浮雲い處でした。外の女郎屋へ賣込まれたら、取返しならぬ事になる處でしたよ。もう御安心なすつて下さい、佐吉がお附き申して居りや、指でも指させやしませんから。」

「眞實に妾も汝に此處で逢はふとは夢のやうですよ。」

「之といふのも、俺が常日頃存じながら御無沙汰をして居るからでムいます。……俺が家を飛出して流れ渡りをして居る時に、詰らぬ失敗から、すんでに多勢に殺される處を、旦那様のお情で助けて戴きました、旦那様は命の親の大恩人、片時だつた忘れはしません。だから今度野上檜澤から大賀へかけ、恐ろしい騒動だと、此方まで大評判、其中に旦那様の御名が有つたので、一層心配でならぬ矢先大賀で一揆が攻め破られ、大將分は討死と聞きましたので、こりやかうしては居られないと、實は内々で様子を見に行つて來たのでムいました。」

「あの汝さんが。」

「左様です。而して只今歸つたやうな譯で。」

「阿父様の行方は判らなかつたでしやうね。」

「上檜澤の大庄屋、金井惣兵衛さんが討死したぎり、旦那様も知れなければ、評判の無名の義人といふ方も、何處へ行きなすつたか、地の中へ吸ひ込まれたやうに、消えて失なつたのでムいますよ。」

「悉ツ、義人様が。」

「左様でムいます。だからお上では、石を起し、瓦を剝しても搜して居なさいますが、どうして彼方は、お上の役人衆の手に合ふ方ぢやムいませんや。」

義人の行方が解らぬといふ意外の話に、お袖は突き飛ばされたやうに驚いた。  
「其様な事は有りません、彼方は郡奉行の鳴海といふ人の手でお召捕になつたのでムいます。妾は義人様を救ひ出したければかりに。」

「何と仰しやいます。鳴海の旦那に義人さんが召捕られたと、それは根も葉もない事で、義人さんは水戸領分の救ひの神様、不淨纏なぞの懸らう筈はムいません。……一體誰がそんな事を言ひやしたね。」

「夫は里見立三といふ人の妾だつた阿辰さんといふ人。」

「あゝ彼源氏繪ですか。彼女と來たら悪鬼夜叉が人間の美しい女に化けて居るんで、彼奴は人間だと思つたら大違ひですぜ。俺も彼奴に騙された事があるが、恩も義理も構はない恐かない女ですぜ。彼奴がどんな事を言つても、決して眞實にしちや不可ませんよ。ぢや彼奴がお嬢さんの身を食つたに違ひ有りませんや。忌々しい畜生だなア。」  
と佐吉は眉と目を一緒にしかめた。

「彼麼奴を眞人間だと思つちや不可ません。彼奴は人を騙して泥田へ踏ん込ませたり、生血を吸つたりするのを、自分の道樂にして居やがるんで。だから里見の妾になつて、慘い事を喰のかしたり、さ

したりして居るんですよ。彼奴は金毛九尾の狐の化けた姐妃見たいな女でさあ。……一體どういふ事で、彼奴がお嬢さんを騙したんです。」

阿辰の恐ろしい事は知つて居たが、よくも彼いふ風に、人が騙せるものだと、お袖はただ驚き呆れた。

「彼人はもう里見と手を切つて了つたのでムいますよ。」

「何だか知れたものですか。彼奴は千の中に二千の偽の有る女です」と、佐吉は口を極めて罵る。

「夫から彼人は、もうお上の御用を廢めて、妾達の味方になると言つて、妾を連れて逃げて下すつたのです。夫は大賀が破れて、阿父様も行方が知れず、義人様は里見に討たれて傷を負ひなすつて、甚八といふ人に負さつて、引上げなすつた時でムいました。妾は敵の生擒になつて、何處とも知れぬ茅屋へ押し籠められますと、其處へ入つて來たのは、里見でムいました。而してあらう事か、妾に淫な事を言ひかけるのでムいます。」

「役人の癖に、太い奴だなあ。」と義に勇む佐吉は齒を噛むだ。

「妾はモウ手籠にされる處でムいましたが、折よく其處へ來てくれたのが、彼阿辰といふ人でした。」

「ウム成程。」

佐吉は阿辰の心中を讀まうとするやうに、首を擔げつゝ吸口をギユツと啞へた。

「夫で阿辰さんが、大變酷い事を言つて散々里見を遣りこめた上もう今日限り縁を切ると言つて、妾を助けてくれたのでムいいます。」

「ナニ彼奴と里見とは悪縁でさあ、切つても切れるもんですか。あゝ、解つた、而して貴女を連れ出して、遊女に賣り飛ばして金を儲けやがつたに違ひない。俺も以前彼女が旭町で藝妓をして居る時、迂濶引かゝつて、酷い目に合された事が有るので、馬鹿な話ですが、一緒に情死をしようと云つて、人を海へ突き飛ばして逃げて了やがつたので、忌々しいと思ひましたが何しろ里見の妾になつて了つたので此方は手も足も出ないといふ始末なんです。そんな女ですから油断はされませんよ。」

「さうすると、義人様が召捕されて夫を助けるに大金が要ると言つたのは。」

「皆嘘八百です。他で義人様が召捕れたと、問はず語りに吹聴して居たと言ふのも、矢張り貴女を擧す爲、源藏といふ仲間も相拘賊です、而して女囀の藤助に、貴女を賣り附けたと言ふ譯でせう。」

お袖は阿辰の恐ろしい腕の凄い働きに怖毛をふるつた。此人が始終義人に付き纏つて居たなら、嫌でも良に落ちずには居まいと、目前の將來が心配になつてならない。

「何も彼も、一切阿辰の悪い手盛なんです。誠義人様が召捕れたものなら、領分一式に御布令を出して、御所刑にした事を知らさなきやなりませんや。義人様が居る間は、屹度一揆騒動の眞先に立つて皆な指揮してくれると思つて居ますから、農夫達が氣が強いです、夫を挫くにや、義人様が殺さ

れたと言はなきやならないんだから。……又鳴海の旦那が如何に慾張つて居たからつて、外ならぬ義人様、どうして金で逃がすなんて言ふ事が出来るのですか。……未だに義人様を召捕つたと言ふ觸書が無いばかりでなく、大賀一揆野上騒動の重立つた人達を召捕れといふ下文の中に、初筆に義人様が出てゐますからまだ御手當にならない證據でムいいます。」

佐吉の話を聞くと、お袖は始めて安堵することが出来たが、萬々一鐵砲傷の爲に、落命されたでは有るまいかと、違つた苦勞が又殖えて来る。

「お嬢様、義人様の事は、どうしても解りませんけれど、然し鳴海に召捕れたなど言ふのは、眞赤な嘘です。俺が現在彼方まで行つて、鳴海の旦那に確かめて来たんですから、御安心なすつて宜しう御座います。」

遊女屋といふ稼業柄に似合ず、親切な太田屋佐吉は、自身久慈河筋迄出向いて、義人の様子を探つて来たので有る。

「ハイ難有うムいます。嚙骨が折れなすつたでムいませうに。」

僅かの事を慰に着て、優しく世話して呉れる人の情が、身に沁みる程嬉しかつた。

「何がこれしきの事、年中旅歩きが好きですもの、少とも草臥る事は有りやせんが、義人様の消息が皆目知れないのが残念で、お嬢様をお喜ばせする事が出来ないます。夫に旦那も、矢張り解らないやうな事です。」

「義人さんは山奥へでもお隠れになつて、其處で怪我が基にでもお成ちや有りませぬかねへ。」

お袖は瘦せる程心配が加はる。

「其處事は有りませぬ、彼方にどうか有れば、直に知れない筈はないのですから、何處かへ隠れて居なされるのです。而して彼方は姿を變る事が上手で、神出鬼没とか何とか言ふのですから、若しかしたら、大手を振つて、水戸の町を歩いて居なされるまいものでも有りませぬ。」

そやし立てられて、沈んだ氣が何となくソワソワした。

「さうだと、どんなにか嬉しいでしやうね。」とお袖は顔を赧らめる。

「其處でお嬢様、俺も道々考へて來たんですが、幾ら俺が彼方を捜し度ても、丸つきしお顔は知らず知つてる人といふのは、貴女ばかりでしやう。」

「え、妾なら、どんなに姿を變て居なすつても、見損ふ事は有りませぬ。」

「其處で俺が考へたのは、彼の方はどう間違つても御領分を捨て外へ行く方では有りませぬから、貴女が人中に立交つて、外へ出て居なさりや、屹度彼方に出會ふ事が有るに違ひ有りませぬ。俺は無理

にお勧めするんぢや有りませぬけれど、お嬢様が此處で身を落して。道樂に藝妓にお成だつたら、どうしても彼方に早く邂逅やしまいかと思ふんです……だけど此奴は只話だけです。俺の思ひ附をお話し申すだけの事でさあね。」

「眞實に夫なら、彼の方にお逢ひされるかも知れませぬ。……だけど妾のやうな野暮な者に、そんな粹な事が出来ましやうか。」

お袖の心は動いた。藝妓ならば清い肌身を汚れに賣るでは無く、義人に逢つた時にも、立派に言譯は立つので有る。

「出来ないで堪るもんですか。お嬢様は遊藝は元より、香花茶の湯何でも持つて來いなんぢやう。夫に金で身を賣るんぢや無し、道樂の財手勤め、況して俺の處から出なさりや、氣に向いた時はお座敷に出ても、嫌なら斷る分ですから、誰に心配も氣兼ねも有りやせんぜ。」

「さういふ事なら、妾に出来さへしたなら、其方が氣も晴れるし、彼方の御行衛が早く解ると思ひますから。」

義人に逢ふ便宜さへあれば、如何なる苦痛も厭はぬので有る。假令川竹の流れに沈むでも、身を汚さぬ事ならば、少しも厭ふ處はなし。

『ではどうか早くさうして下さいますか。』

「よござんす……尤も嫌になつたら、何時でも廢せるんですがら。……俺やお嬢様のやうな立派な方を、天晴一枚看板に仕立て、水戸中に目を剝かしてやりたいんです。さうすりや、夫が評判になつて義人様が屹度尋ねて來なさいます。」

\* \* \*

佐吉の物好と、お袖の思ひ切つた奮發とは、終に水戸第一の名妓を捏ち上げる事になつた。

「コレ〜お袖は如何致した、お袖を呼べ。」

鶏の中へ鶴が舞ひ下つたやうなお袖の評判は、到る處で姦びすしく、引手夥たの流行妓として、水戸中の人氣を背負つて立つばかり、殊に世間の雲行が險悪になつて、いつ戦が始まるか知れぬとなると、人間の心は著しく荒むので、酒と女に生きて居る間の歡樂におよぐ外、清い樂みといふものは失なつて了ふ。従つて花柳の巷に、黄金白銀の洪水が流れ込むで來る。然も其出水の落口は、お袖目がけて渦巻き漂よふので有る。

太田屋の名妓お袖の評判は、一枚繪となつて擴まる程に高く、水戸の家の中で、苟も男の端くれたる者は、お袖を知らないのを耻辱とするに至つた。

「旦那様方は、さうお言ひなすつても、お袖さんは何しろ附け込みが多いのでムいますから、今言つ

て今直は、あんまり御無理でムいますよ。」

茶屋の女中達は、相手が荒つばい家中者だけに、ハラ〜して、事莫れと祈るばかりだつた。

「附け込みが多いと言つても拙者共は城内の若侍だぞ。明日にも戦が始まれば、命が無いのだ浼々」と待たれるものではないわい。」

と言ふ事が何となく物凄い。

「モウ直に参りますよ。……夫に彼人は、誠に氣儘でござんしてね、氣に向ないと、明いて居ても中々手古すらせるんでございますよ。」

「高が藝者の癖に、怪しからぬ奴ぢやな。」

「だけど旦那様、夫が彼妓の身上ぢやムんせんか。呼びさへすりやオイソレと尻尾を振つて飛んで來るようなら、お呼びなすつたつて香ばしい事は少ともムんせん、夫よりも中々來ないものが來れば、其處に價値が有るぢや有りませんか。」

「成程、貴様の理窟も尤もぢやな。」

「ですからモウ少しお待ちなさいまし。屹度伺ふといふ返事ですから。」

「さうか、……今出て居る先は町人か。」

「そんな事をお聞き遊ばすのは野暮でムいますよ。……ですけれども、何でも御城内の御重役様だと

いふ事でムんす。』

『其れは不可わす。』

重役と聞いては苦手なので若侍は鹽をかけられた蛸鱸のやうにグニヤリとなる。

『ちや仕方が無い。氣永に待つ事だ。』

女中の上手な取做しにくるめられて、若侍達は又賑やかに飲み始めた。

お袖は習ふより馴れて、藝妓勤めも左まで苦勞にならぬ程、無垢な玉の光が、伊達と粹とで磨き出されたので有る。

荒いお召の一つ小袖に、八端と呉絹に贅を盡した晝夜帯、水際立つた仇姿で、家中侍の座敷へ來かゝると、中では割れ返るやうな騒ぎ、お袖待つ間の繋ぎに呼んだ藝者の取持ちが陽氣に發して、ワイ／＼騒いで居た。

梯子を上つて、廊下傳ひを座敷へ入らうとすると、義人といふ言葉が偶と耳に入つたので、お袖は電撃されたやうに痺りと立ち止まつた。

『又義人一件で、内々騒ぎ始めたのを知つて居るか。』

一人が思ひ出したやうに尋ねると、一人が氣乗せぬやうに受けて答へた。

『重役方の義人病だ。ナニ義人が水戸表へ乗込んで來るものか馬鹿々々しい。』

二人の話によつて、無名の義人が水戸附近に現はれたらしい事が推察される。お袖は一句も洩らさじと息を殺した。

『いや左様でない。今度は里見が確と其事を受合つたと言ふのぢや。夫だによつて、内々で四方八方へ手配りしたと言ふではないか。』

『旨く召捕れるかなア。』

\*

\*

\*

\*

生死不明の義人が水戸へ入つたと言ふのは、お袖に取つて空谷の跫音で有るが、其出入が早くも役人に覺られて、忽ち網を張られて居るといふのは、一層の危険で有る。彼人の事だから、針の穴のやうな處を摺りぬけ、障子の破れからでも入つて來ぬものでもない。水戸へ入り込んがといふのは、恐らく事實に相違無からうけれども、上役人に油斷が無いから、願はくば無事息災で、さうして妾だけには逢へるやうにと、お袖は神かけて胸に祈つた。

『一體無名の義人といふ者の素性は分らぬでは無いか。何で佐幕方を敵にするのぢやらう。』

『里見の話によると、彼は下村紋十郎の子ださうだ。』

『え、彼裏切者のか。』

事の意外に相手が驚くよりも、立聞きするお袖が冷りとさせられる。其裏切といふ事だけは、彼人の爲に、何人にも言つて貰ひ度ないのだ。

「驚いたではないか。然らば親に似ぬ鬼子といふのぢや。」

「つまり親の不評判を取返さう爲めに居るのだから、金銭慾得づくで無いから恐ろしいのぢや。先年天狗方が水戸へ迫つて来た時にも、天狗に加はつてえらい働きをした。天狗方の家族を、盗んで逃がしたのも皆彼奴だといふ話しだわい。」

「何の爲めに義人が水戸へ入込むのだらうな。よもや當地で一揆を起せまいが。」

お袖は益々息を殺し、堅く両手で轟く胸の芳醇な隆起を押へ附けた。

「さうでは無い。拙者の考へでは、太夫の首を狙ふのではないかと思ふ。」

「市川殿か。」

「左様ぢや、元の結城殿の跡を繼いで勤王退治をしたのは市川殿、諸生黨の親玉だてな、天狗では敵として睨む。然し今飛ぶ鳥墜とす御家老様、何ともする事が出来ぬによつて、義人が内々刺客として入り込んだのかも知れぬのだ。義人が首尾よく市川殿を刺すか、市川殿が義人を取押へて首を刎るか、此處見物でゐるぞ。」

無責任な若侍は、勤王とも佐幕とも附かず、自分だけが面白可笑しく醉生夢死の臙の霧の中を泳

ぎ廻つて居ればよいのだ。

お袖は好い頃合を見計らつて、今来たやうな顔をしながら、靜かに障子を開た。

「オウ来た、眩しい後光が映すぞ。」

水戸一の名妓の來迎に、一座はドツと歡聲を擧げた。軟かい撫肩の滑らかな線の輝き、嬋娟な花の顔の快い迄の媚めきに、浮ついた若侍の心は四方八方から手繰寄せられて行く。

「オウお袖此處へ來い。」

何處へ坐つてよいか解らぬやうに手招きされて、お袖は是非なく眞中に来て挨拶したが、何時しか義人の噂をした人達の方へ寄つて行く。此人と知己になれば、義人の消息を知るに便宜なのだ。

身を落して藝妓となつたばかりに、果して戀こがれる人の音信を知る事が出来たと、必死になつて此上の加護を、懐の持佛に念じた。

「お袖此方へ來て酌をしてくれ。俺達は先刻から待ち焦れて居たのだ。」

「でも此方の方から御順にお酌をしますわ。」

盼たる美目をテラリと注がれると、いきり立つたのが、忽ちグニヤリとなる程、お袖の美の威光は節くれ立つた武勇の若侍を壓して行く。

「貴君、大層此頃は、町方なんぞで人別調べが殿しいとかで、町人はビクビクして居るんですが、御

屋敷方はそんな御心配がないから妾や大好きなんですよ。」  
 請けたのを思ひさしにして、お袖は思ひ切媚めて見せる。若侍は命が快く招り減つて行くやうに覚え、魂が頭の腦天からよめき出る。  
 「うん。義人とか何とか、下らない者が出沒するのでな。」  
 「コレよせ。」と、一人は袖を引いて秘密の洩れるのを防いだ。  
 「ナニ構ふ事はない。乃公は一體新規お召招になつた大川磯之進とかいふ郷士上りが大嫌だ。」  
 お袖は不意に突飛ばされたやうに驚き恐れた。義人にめぐり合ぬ先に、義人の敵なる磯之進が、先水戸に来て居るので有る。

\*

\*

\*

\*

大川磯之進の忌まはしき名は、お袖の胸をげじくのやうに這ひ廻つて居た。然し其氣持の悪い蟲は。いつしか冬籠りした事とのみ安心して居たのに、義人が姿を現はしたといふ嬉しい音信と共に、其嬉しさを棒で掻き廻すやうに脅かした。  
 磯之進は戀の遺趣晴らしから、是非に義人を召捕り、怨みを復さうとして居るので、義人に取つては、里見より尙始末の悪い敵で有る。妾が一足先に彼の方に逢ひさへすれば、どんな用心でもさせる

けれど、只水戸へ入つたばかりで、影も形も無いのだから、全く取附く島もない、然し彼の方も太田屋からお袖といふ變り者の藝妓の出たといふ事を聞いたなら、名が同じで有るし、郷士の娘といふ評判も高いのだから、もしやと思つて招んで下さるかも知れない。  
 頼む處は只夫ばかり、覺束なく案じ勞らふので、自然塞ぎ勝になると、若侍達は寄つて集つて鬨りかける。其蒼蠅いのも愛嬌稼業に負けて、世辭で轉がして居ると、仲居の女が来て、お袖は耳打ちした。  
 『植木屋さんからお客様で、是非お袖さんと言ふ事でムいますから。』  
 『アラお蝶さん、妾はまだ外に御約束が有るんですのに。』  
 お袖は早く歸つて、主人の佐吉に相談し、義人に尋ね合ふべき工夫をしようと思つたので有る。  
 『いゝへ、今日のお客様は、外を断つても出て戴かなければならないのですよ。』  
 『オヤどうして。』  
 お袖は仲居の無理に、不愉快な心地が揺すり立つた。  
 『夫でも並の方では無いんですもの。』  
 『誰方なんですの。』  
 『御家老様が是非お袖さんをお言ひなさるんですから。』



「御家老さんといふのは、彼市川三左衛門といふ方ですか。」

お袖もギョツとした。市川は水戸一藩の執権職、飛ぶ鳥墮す赫々たる威勢の持主ながら、勤王家に取つては、怨み骨髄に徹する敵の張本で有る。此人有るが爲に、義軍の一揆はいつも破れ、上檜澤の命井惣兵衛も討死し、義人の兄太郎は義人に代つて惨たらしい死を遂げたので有る。義人の母お信の悲しい藻掻死に、下岡源太夫の生死不明、久慈川筋の散々なる荒野原に鬼火の燃ゆる淺ましい有様、親子夫婦が行方も知らず離散したのは、皆此人の爲で有る。

然も義人が寝るに家なく、啖ふに食なく、狩場の兎のやうに追はれて居るのは市川三左衛門有るが爲で有る。義人が萬死を冒して、水戸へ入つたのは只一人の元兎市川を仆す爲で有るとすると、お袖は口惜しいながらも、市川に逢つて置く事が、何かの爲にならぬとは限らないのだ。

「そんなら此方へ譯を話して、植木屋さんへ行く事にしますから。」

お袖が譯もなく承知したので、仲居は喜んで引退つた。若侍達も貰ひをかけた相手が太夫と知つては、いきり立つた處で喧嘩にはならぬので、長いものには捲かれると澁々承知する外なかつた。

お袖は化粧くづれを繕つたり、帯をキリ、と直したりして、敵陣へ使する軍使の、緊張した晴がましい心地で、直に植木屋やへと出向いた。

「先刻からお待ち兼ねなのです、今又迎ひを出した處行違ひになつたかしら。」

植木屋の内證の言葉を聞き流して、お袖はさどめく二階へ上つた。

流石に怯える心と、轟く胸とお袖は鮮かな臉を上氣させつゝ、何気ない風を装つて、隔ての襷に手をかけた。先刻若侍の座敷に呼ばれ、義人の噂を聞いた時とは同じ緊張を持ちながらも、緊張の意氣込が違つて、必死の思ひがした。

昂まる胸を押へ、喘く息をジツと堪へて、お袖は靜かに襖を開けた。

「オウ美人参つたか、ズツト太夫の側へ参るがよい。」

歡樂の夢幻郷は、美人の姿を添へて、一層明るくなつた。

お袖は最初の印象に於て、三左衛門の姿を憎いと思ふ瞳に刻み附けやうと思つた。彼女の媚めく春に仄くやうな、軟かく甘い眼には、千萬無量の情を罩めるかと思えながら、實は敵を呪ふ怨みが白熱の火と燃えるので有る。

お袖の眼に映じた市川は、下品な賤しい平顔と思つたに反し、色白にして鼻筋通り、眼に鋭い光は有りながら、自づと人を押けるやうな徳を具へ、苦み走つた男らしさの分別盛りだつた。

「オウ其方の評判は素晴らしいもので有るぞ。聞きしに優る美人ぢや。」

市川は自からなる眼の光をうつとりさせて、捨がたく好ましいものにお袖を見詰めたので、お袖は自分の素性を見露はされたかといふ怯れが出て、面羞ゆく眼を伏せた。始めての立會に於て、口惜しいながら立遅れの氣味となつたのである。

「太夫如何でいます。お氣に召しましてすみやうな。」

取巻の佐山といふのが、首をすくめて自慢し、太夫の賞詞に預つて、あはよくは出世したいと思ふのである。

「ウム嬢娟なもので有るわい。」

市川に賞められて、お袖は揆ばゆく齒がゆくなつて來た。

「他人の空似とは、能う言ふたものぢや。」

市川の咄くのを、聞捨にする佐山ではない。

「これは太夫には、何か御見覚えがござりまするか。恐れ入りました事で。」

「いや左様では無いが、お袖の面差が玉に似て居るやうに思ふのぢや。」

「アツ成程」と佐山はボンと膝を打つた。

「御意の通り全くでござりまする。」

來い〜早々、自分の事を話題にされたので、お袖は益々氣持が悪かつた。

「ハイ、お酌を申上げましやう」と銚子を執つて躰寄ると、佐山は又頓狂聲を出した。

「どうも聲までが似て居りますな。」

「嫌ですよ旦那。妾が誰方に似て居るんですよ。」

お袖は聊か躍起となつた。

「太夫様の御休息お玉様といふ方に似て居るのぢやて。貴様は綾かり者ぢやぞ。」

「オヤ、飛んだ事でういましたね。」

敵の妾なぞに似たのが、何の綾かり者であらうといふ不愉快な心が、思はず口先へ轉がり出た。

「イヤお袖、玉に似たといふが、其玉といふ者は最早世に亡きものぢや。乃公は色に溺れるではないが、玉は不憫の死にやうを致した者で有るによつて、乃公は今にも氣の毒に思ひ居る。其玉に其方が似たとあらば、迷惑でもあらう、然し乃公は玉が此世に甦つたやうな心地致すでな。之より再三參るであらう。せめて酒の酌でも致してくれ。」

世間からは無慈悲の鬼と言はれ、勤王方からは悪魔と罵しられる諸生方の首領にも、恚うした一脈の優しい春風は仄くの有る。血も涙もない殘虐無道の男とのみは思はれなかつた。

「お袖、貴様は冥加な事で有るぞ、太夫の御意に入れば、水戸家御領分で、貴様の蔭言一つ言ふ者は

ないのぢや。能御機嫌を取結ぶがよいぞ。」

佐山にそやし立てられてお袖は燃ゆるばかりに顔を赧めた。其初々しさを一入の優しみに賞翫したかも知れぬが、お袖の顔を赧らめたのは、心中に憤激の血を逆巻き立てたからである。

「お袖さん、一寸耳よりの話があるんだけれどね。」

植木屋の内儀は、内證に續く小座敷にお袖を呼び入れた。お袖は客が歸つたので、夫を玄關に送り出して、直に歸り仕度をして居る處だつた。

「オヤ内儀さん、何か御用。」

「マア此方へ入つて、其處を閉めておくんないよ。」

内儀は長煙管を吸ひ附けてお袖に渡しながら、出端の茶を注いで出した。

「ハイ、難有う。」と、お袖は受けて下へ置く。

「あの和女さん、家で御家老様にお目にかゝつてから、モウ七八度も御運びになつたやうだね。」

「御家老様が……さうですよ、ちよく／＼入らして下さいます。……いつも佐山の旦那をお連れなすつて。」

「御家老様は大層和女さんがお氣に入りなんだよ。」

「オヤ何ですか。」

「いゝへ眞實、全く眞剣で入らつしやるんだよ。」

お袖は何が無しに、蟲津が走る程氣持が悪かつた。

「妾見たやうなものを。」

お袖は軽く受流さうとしたが、功勞經た内儀が、要領を掴まずに放すものではない。

「和女さんを是非落籍せたいと、あの佐山さんから御相談が有つたのだから、其積りで居ておくんない。和女さん運が向いて來たんだだね。」

内儀はお袖の承知不承知は、元より問題では無いと思つて居る。今水戸三十五萬石を兩手に握つて政道の綱を押へて居る國老の勢力は、宛ら朝日の登るが如く、中納言の御館と雖も、御三家の隨一、天下副將軍の格式が有るばかりで、實權に於ては市川を動かす事は出來ぬのである。其國老から所望されたお袖は、取るにも足らぬ町藝妓として、女冥利が無くならねばないのだ。

「アラ、妾あんまり癡耳に水で△いますから。」

「夫だつて福徳の三年目、柵から牡丹餅とは此事ぢやないかね。彼の殿様の御部屋様になりや、どんな我が儘氣隨もされれば、榮耀榮華は仕方第、眞實に言ふ芽が出たんだよ。」

「でも妾は、一人の旦那を大切に守つて居るよりも、恚うした水商賣の方が、どんなに氣樂で

「知れませんが。」

「お袖としては、巧に言ひ切つたもので有つた。内儀は呆れてお袖を見詰めたが。」

「マア和女さん、慾を知らないにも程が有るよ。和女さんがウンとお言ひなら、身の代は望み次第さうすりや。和女さんもよし、大田屋さんもよし、四方八方好い事づくめぢや無いか、考へて御覽なさい。」

「さ。」

間に立つた植木屋の内儀が、第一に恩典に浴す事が出来るのだ。

「でも妾は少と心願が有るんですもの。」

「大層古風だね。どんな心願。」

「妾は男に肌を觸れない心願がしてあるんですもの。」

内儀は目を圓くして驚いた。天地が引つ繰返つて、耳の邊でのた打ち廻るかと思はされる。

「今時そんな馬鹿な事が有るもんですか。茶断ち鹽断ちは有つても、男断ちと事ふ事は、聞いた事も有りやしない。和女さんのやうな美しい女が、不具でもなけりや、そんな馬鹿氣な事が有りますか。第一世間の男が黙つて捨てゝは置かないぢや無いか。」

「でも眞實なんですもの。」

「何處か身體に悪い處でも有るの。」

「内儀さん、誰にも言つちや不可ませんよ。實は妾は男を持ってないやうな身體に生れ附いたんですもの。」

窮すれば通ずるお袖の出鱈目は如何にも誠しやかに聞える。

「困つたね。ぢや家へ歸つて、旦那に一寸來て貰つて下さいな。妾も佐山さんに、儲かりした御返事をしなけりやならないんだから。」

折角藝妓の名に隠れて、人目を忍ばうと思つたのが、切迫詰つた大事となつた。

\*

\*

\*

\*

御國家老の寵愛を一身に集めて御部屋様となるとあれば、二つ返事で飛附いて來るだらうと思つたに反し、お袖は人交はりがならぬ身體だの、男を断つたのと、古風な事を言つて、容易に植木屋の内證のいふ事を聞かない。

事に因つたらば、眼から鼻へ抜ける伶俐の女だから、思はせ振に引摺つて置いて、黄金の量目を殖す胸算用かも知れぬと、自分の心に引比べて考へて見た。

どうでも抱主の太田屋を口説いて、高飛車にお袖を押へ附けねばならぬと、女房は佐山と相談して主人の佐吉を呼び迎へたので有る。

お袖から前以て下話しは聞いて居るし、今又急な迎へで有るから、必然其事だと、グツと片唾を飲み込んで、佐吉は植木屋へ出かけて行つた。

『オウ太田屋が、能参つた。ちと内談が有るでな。』と、待ち構へた佐山はモウ單刀直入で係る。

『へー、手前のやうな者に、御歴方が何の御用で。』

植木屋の女房は、直に引取つてお袖に話した要點を耳打した。お袖は慾が無くとも、佐吉は有り過ぎて困る程だらうと見透して居たのだ。

『へー左様いふ事でございしましたか、誠に難有い事で。……お袖が歸つて来て、何とも言はなかつたものですから、こんな冥利な話をわしは夢にも知りませんやうな譯で。』

大分話がわかりさうなので、女房はほつとした。

『眞實に太田屋さんへ、福の神が舞ひ込んだんですよ。』

『然しどうも舞ひ込んだだけで何にも措かずに、どうやら素通りしさうな様子で。』

『オヤどうして。』と女房は少し勝手が違つて来る。

『どうも彼の女だけは俺の自由にはならないんですから。』

『だつて汝さんが主人ぢや無いかね。』

佐吉、是非共其方の才覺で押伏せてくれ。さうすれば其方もよし、又此處の内儀さんも、俺も面目

を施さうといふもんだ。

『御尤もでムいます。能彼に申し聞かせますが、彼は我儘者でムいましたな。平生言つてるのでムいますが、一人の旦那を取るよりは、いつまでも藝者をして、大勢の御客の相手をする方が、氣が樂で可いといふやうな變り者でムいます。夫といふのも、全く身體の何處かに不足が有るからだと思はするので。』

『其方まで下らぬ事を申すな、彼女が其處女で無い事は、俺がよう知つて居る。彼女は何か外の男の爲に心中立を致して居るのぢや。』

『どう仕りまして、其様な事はなからうと存じます。彼女が手前の抱へとも申すのなら、無理にも申し聞けますが、實は主人筋の娘に方りまして、物好きに此稼業を致して居りますやうな次第で。』

『其方の主人筋の娘か。』

『マア左様な譯でムいます。』

『然らば其方が旅を流れ渡つて居た頃の話じやな。』

『へー、どうも能く御存じで。』

『其位の事を存ぜぬで何とする。お袖が野上の下岡の娘で有り、源氏繪の阿辰に騙されて、此方へ賣

られて来て、運好く其方の家へ打かつた位は、疾に承知致し居るのぢや。

佐吉は頭から佐山を茶にしかかつて居たのだが、思ひの外の窮所を衝かれて、退引ならず息詰つた。

「下階の娘とあれば、謀叛人の子ぢや、夫を匿まう其方も同罪ぢやぞ。……いや其様な野暮の事を、軟かい話には持出さぬが、然し其方も歸つて、お袖とトツクリ相談を致し俺の顔の立つやうに働いて呉れ。」

佐吉は全然脅やかされて了つた。此の内證事を、先刻承知して居ながら、人を食つた掛合をするので有るから、此話は容易な難關では無いと、怪しからず驚き惶てる。

\* \* \*

「コレお袖、折角彼様に太夫が仰しやるのぢや。一つ伝と言つたらどうぢやな。下らなく藝妓勤めを致し居つて、若い中は夫でよからう。然し年を取つて、梅干婆になつた時の事を考へて見なさい。卒塔婆小町の繪は、あまり見よいものではないぞ。」

植木屋で三左衛門と佐山の前に引附けられたお袖は、手詰の挨拶に困つて、モジ／＼して居た。「御親切様に難有いんでムいますけれど、此間も申上げたやうにお恥かしい身體なんですから。」

「コレ／＼又しても其様な事を言ふぞ。貴様の主人の佐吉も慾を知らない奴で、同じやうな事を申し居るが、貴様は外に男が有るので、下らぬ事を言ひ張るのであらうな。」

「アレ旦那様、妾に其塵粹な人があれば、苦勞はしないんですよ。」

「夫なら太夫の思召を、清く受けたら宜しいのだ。」

佐山が眞向から責めるのを、黙つてニヤ／＼聞いて居た市川は、靜かに佐山を制した。

「コレ其様に疊みかけずともよい。斯様な事は短兵急には參らぬものぢや。此方の言ふ事を、オイソレと聞かぬ處に、お袖の價値が有るのぢやて。」

生温い市川の言葉に、佐山は迂散な顔をした。水戸三十五萬石を兩足に踏まへて、ピクとも動かさぬ程の人でも、女にかけては半熟鶏卵のやうに、煮えたと生とも解らぬのだと思つた。

「大きに御尤もでムいます。手の懸る料理ほど、結構に賞翫致されるもので。」

佐山も仕方無しに、取つてつけたやうな追従を並べ、テレ隠しの盃を擧げる。

「然しお袖、其方は何ぞ望が有つて、其望みの協ふまで、男を斷つとでも申すのかな。」

誘ひかけられるやうに市川から聞かれて、お袖はしまつたと思つた。早く恚ういふ風に言つて、通せん坊をして置けばよかつたので今更左様だと言へば、前に身體が不自由だと言つたのが偽りになつて了ふのだ。

「いゝえ、別に左様いふ譯ではございませぬけれど。」

「矢張左様なのだらう。」と佐山は又口を出す。

「どうだお袖貴様が男を断つて迄願つて居る望みといふのを、拙者が中て見ようかな。」

佐山は鼻を蠢かして遮り出た。

「佐山夫は一段と興があらう。中て見るがよい。」

「ハア、マア試しに言つて御覽なさいな」

お袖も負けない氣になつて、軟かい胸を、見せびらかすやうに反した。

「中つたら面白い事ですよ。」

「では申さうが。驚いては不可ぬぞ。貴様の願掛といふのは、或男に逢ひたい爲ぢや。」

「アラ嘘ばつかし」

お袖の顔には、慌たどしい色が蹴つまぢいたらしかつた。

「嘘ばつかしのものか、然も其男といふのは、御領分のお尋ね者なのぢや。」

お袖は胸中の秘密を無慙に言ひ中られて、身體中の血が、湯よりも熱く渦巻き立つた。

「夫見る。顔を眞赤に致したでは無いか。」

「いゝへ〜。飛んでもない事を。」

「然らば其男を引括つて、礎柱にかけるがよいか。」

「マア待つておくんなさいまし。夫は一體何處の人の事でういますへ。」

「貴様の胸の中に匿まつて有る男だ。其男は上に於て殿しきお尋ね者だ。然し貴様の料見一つで、上に於ても、お目こぼしをして下さる。其上目に餘る事など致さぬなら。其様な事は、太夫の手加減一つにある。貴様は好んで胸の中の男の命を取りたいか、夫とも大切に繋いで置きたいか、能考へて見るがよい。今日とは言はぬぞ。」

佐山の追窮は、實に邪慳なもので有つた。お袖は大きな山に行當つて、前へも行かれず後へも退れずのた打つ苦しみに落込んだ。

「オウ酔ふたぞ。冷たい風が小鬚を掠れ行くのは、酒の上の贅澤ぢやな。」

忍び姿の市川が、黒羽二重の粹な着流しで、植木屋の門を出ると、見送りの内儀や女中達が、土に蹲くまゝばかり追従する。

佐山は一足遅れて、内儀に何か囁いたのは、お袖の事を此上にも頼むのであらう。アタフタと大夫の跡を追つて行く出逢頭に、向ふから来る編笠武士と、端なく鎧の先をカチリと當た。ほんの僅に觸

つたのだが、彈機はつぎの附いた處ところだったので、佐山さやまは調子てうしを失つて、生憎あひにく水溜りみづなまりの中へ、無慚むざんに膝頭ひざがしらを突き、両手りやうてで大地だいちを押へて了つた。其形そのかたちが何とも言へず可笑わかしかったので、色町いろまちの女をんなは、ワツと言つて笑ひ崩れた。

『これは御無禮ごぶれい、お怪我けがはござらんだか。』

元より佐山さやまの方から突當つたのでは有るが、大の武士ぶしが大地だいちへ膝ひざづいた不覺ふかくに、編笠あみかさ武士ぶしは氣きの毒どくさうに會釋あひやくした。

『ヤツ此奴こやつが、何の遺恨ゐこんで拙者せつしやを突き飛ばした。』

酒さけの酔よめに四度路よどろになつた佐山さやまは、テレ隠かくしにいきり立つて來る。

『これは誠に迷惑めいわく千萬まん、打かつたは御身おんみからではムらぬか。』

『黙れ。貴様きさまは遺恨ゐこんで拙者せつしやに恥はぢかゝせやうと致したのぢや。浪人らうじんの分際ぶんざいとして。御城内ごじやうないの侍さむらいに狼藉らうじやくするとは怪けしからぬぞ。』

佐山さやまが酒さけの息いきを吹きかける程ほど、編笠あみかさ武士ぶしは寧ろ小腰ここしを踏めた。

『いや、御城内ごじやうないの御武家おんぶけならば、手前てまへも軒のきの下したに避けて居れば宜よろしうムつた。然らば御身おんみの邪魔じゃまにもならなかつたでムらう。然し御同然ごどうぜん往來中わうらいちゆうの出合頭であひがしら、いづれが悪いとは申し兼ねかねにより、御不承ごふじやうして下くださるやう。』

編笠あみかさ武士ぶしは無法むはふの言懸いひかりに忿激ぶんげきしながらも、成るべく事勿ことなれと、家中かみちの者ものの無理むりを避けて居るらしかつた。

『コレ待まちてツ。』

佐山さやまは執念しつねん深く其行手そのゆくてに塞ふさがつて大手おほてを撫ひげると、両手りやうての平ひらには、氣きの毒どくな程ほどベツトリと泥どろが附ついて居た。

『ハテ儲たく、御不承ごふじやう下され。』

『不承ふじやうして遣つかはすにより、土下坐どげざして詫わまれ。第一だいいち冠物かぶりものを取らぬとは無禮ぶれい千萬まんだぞ。』

『仰おほせの通り、編笠あみかさを脱ぬがぬは失禮しつれいながら、恁様ひんやうな色里いろさとでムるにより冠物かぶりものは御容謝ごようしゃに預あづかりたい。』

『何を汝なん、脱ぬげと言いふに脱ぬかぬか。』

突然いっせに笠かさの縁へりに手てをかけるのを、身みを躲かして避よけながら。

『冠物かぶりものだけは、御容赦ごようしやに預あづかりたい土下坐どげざせよとならば、手てを支たいてお詫わ申まをすでムらう。』

何時いつの間まにか周圍まわりを遠卷とほまきにした見物けんぶつは、佐山さやまの我意ががいを罵ののしるもあれば、編笠あみかさの意氣いけ地無ぢなきを言いしるも有る。

『サア誤あやまるものならば誤あやまれ、貴様きさまも兩刀りやうたうを帶おすからは、浪人らうじんしても武士ぶしの端はしであらう。命惜いのちおしさに上下座じやうげざしたらば一生いっしやうの譽ほまれぢや。』



『いや左様の次第ではムらぬ、僅に突當つた當らぬ位で、武士なる者が命の取りやり致すなど、左様の安き命は持ち合せぬにより、手を支いてお詫申すと言ふ迄。』

『口賢しく言ふても、水戸藩中の侍の威光には協ふまい。サア手を支け。』

罵しられて編笠武士は無念に思つたけれども、大事の爲に身をも名をも惜むと見えて、あはや佐山の前に手を下さんとする時、先へ行き過ぎた市川は、佐山が續かぬので、不審に思つて引返して來た

『佐山く、何を致して居るのぢや。』

『アツ之は大夫、只今之なる浪人が無禮仕りましたにより。』

大夫の一言を聞くと、編笠武士は俄に屹となつて、市川の方を諦視めた。今水戸城下に於て家中者から大夫と崇められるのは、國家老市川三左衛門の外は無いのだ然も市川とあれば、尙更避けて平伏もせねばならぬのを、編笠武士は佐山に詫ながら、反つて國老には反抗の身構へをした。

\* \* \*

俄然として編笠武士の態度は變じた。猫のやうに優しかつたのが俄に餓える虎となつたので有る。怯れたやうに踞めんとしたる腰は、銀線の如くに緊張し、颯爽たる全身の精氣は見る／＼四肢に充ち渡つた。然し彼の態度の一變した事は、全く機微の間に有るので泥酔した相手には、氣付かうやう

も無かつた。

『これ廢めい。其様な取るにも足らぬ浪人に構ふて何とする。早く參らぬか佐山。』

鷹揚に傲ぶつた市川の言葉を聞くと、編笠武士は忽ち束々と進み寄りながら。

『黙らつしやい。取るにも足らぬ浪人者とは誰の事。』

佐山に對して、恭謙に遙くたる彼は、飛ぶ鳥墜す大勢力に對する時に、反つて一步も引くまじと對抗する。然し水戸三十五萬石の城下に於て、市川に楯衝くのは、薄い殼の卵が大岩石に打かるやうなもので、結局は吾身を破る外はない。

『ヤア此奴が、畏れ氣もなく大夫に向つて何を申す。是なる御方こそ、御國家老市川三左衛門殿に御座すのぢや。』

泣く子も黙る市川に向つて、差出た頬を叩くのは、身の程知らぬ白痴で有ると、佐山は目を瞬いたまゝ、呆氣に取られるばかりだつた。

『市川三左衛門とは何だ。貴様には上役から知れぬが、拙者には何處の馬の骨か、聞いた事もない名ぢや。』

『ヤア己が。』

佐山は烈火の如くになつて、此處ぞ忠勤の見せ處と、突如刀を抜いて振りかぶつた。

「抜いたぞッ。」と見物人は雪崩を打つて逃げ出す。

此時植木屋に残つて居たお袖は二階の椅子から往來の騒動を見たが、今送り出した佐山が虹の如き白刃を振冠つたるに、相手の編笠武士は、柄に手をかけて半身になつた。龍虎相闘はんとして、黒雲は逆しまに天上より追かぶさつて来る。形勢既に窮まつて、殺氣は蒼白く刃の切先より燃え立つ。

然もお袖の目を怪しく刺戟したのは、其編笠武士の扮装形で有る互に果し會ふべき危急に迫つてもまだ編笠を拐ぐり捨やうとはせぬのは、よく人目を忍ぶのでは有るまいか、もしたゞとすれば彼方では無いかといふ直覺が、蟲が知らすやうに、彼女の胸を轟かした。

相手は畢生の敵たる市川なり、夫に刃向ふのは水戸領分に恐らく彼方より外には有るまい。

お袖はバラ／＼と二階から駈け下りると、素足の儘に往來へ駈け出した。

「あゝ待つて〜。待つて下さいまし。」

甲高い女の金切聲に、突然佐山の前に割つて行つて、兩手を擴げて編笠武士を後に圍つた。

「ヤア浮雲い。貴様はお袖ではないか。」

佐山は意外の仲裁に、タジ／＼となつて持扱つた。

「もし佐山さん、あんまり行き過ぎて居ますけれど、此場は妾に任せておくんなさいまし。」

蒲柳な身體を突き付けると、爛熟した女の仄く薫りが、殺伐な鬼氣を痿すやうに、柔かく時めく。

「えゝ退け〜、女の癖に、邪魔な奴だ。」

佐山は振かぶつた儘白刃を持扱つて、上げも下しもならず、苦しい呻めきを洩らした。

「マア佐山さん、立派なお武家様が、往來の鞘當位で、切つた張つたは、あんまり野暮ぢや有りませんか。妾に任せて、其御刀を仕舞つて下さいまし。夫とも意地でならないとお言ひなら、止めた妾をスツバリ斬つてから、勝手に命の遣り取りをおしなさいよ。」

俠の女の意氣地其儘、お袖の勝氣は何處までも相手を屈服させねば已むまじき概が有る。

\*

\*

\*

\*

紅い灯の浮いて媚めく色の巷に武士と武士との殺伐な鞘當、あはや血の雨降らせんず危急の刹那に天女のやうなお袖が割つて人つたのは、花燎亂の嵐の中に、一羽の孔雀が舞ひ下つたやうだ。眼も眩むばかりの光彩が、見るも鮮かに燦めき渡り、遠巻の見物は、呀と感嘆の聲を放つた。然も編笠武士を圍つて、妾を先へ斬れといふ伊達妾は、江戸土産の錦繪を正で見る晴がましさに、酔へるが如く恍惚とした。

「サア佐山さん何卒其御刀を納めて下さいまし。武士の刀といふものは一大事の時に抜くものであります。詰らない意地づくで、滅多に柄に手をかけると、可惜刀が泣くぢや有りませんか。」

佐山はお袖の舌刀に言ひしらまされて、タジ／＼となると、見物はドツとどよめいて、ガヤ／＼とお袖の度胸を賞めたへる。

『何處の方か存ぜぬが御厚志の扱ひ辱けない。然し女の身で浮雲いによつて、其處を退かれい。』  
編笠武士は隔てるお袖を押退けんとした、始めに怯なる者が、後に強くなつたので、無念に燃え立つ足の拇指は、草履の先からジリジリと大地を嚙むだ。

『あゝ貴方様もお聞き分のない。』  
お袖は身體を前に向けた儘、頭をめぐらして、斜めに編笠の中を見上ようとすると、彼方は見られじとするやうに、態と横にそむけた。

『不肖な女の入らざる止め立て耐忍がなさり憎いか知れませんが、此處は妾の顔を立て、素直にまかして下さいまし。』

『折角の仲裁ながら、餘りに無法な言ひが、浪人の銷刀が切れるか切れぬか、天下副將軍の水戸家の御家來に、目の方り御覽に入れるのぢや。』

『汝ツ、まだ申すか。』

佐山は又伸び上つて、大上段に斬かゝらうとした。然し相手の前には、お袖が兩手を擴げて居るので、互に氣が焦るばかりで、一足たりとも踏み出す事がならなかつた。

『コレ／＼佐山、何を白痴た悪戯を致し居るのぢや。お袖の言ふ通り、武士の刀は一大事の節抜くものぢや。恁様な小事に醜るしい。刀を納めて早う參れ。……お袖よう止めて呉れた。』

流石に一藩の束ねをするだけ、市川は悠揚として迫らなかつた。

鶴の一聲に、佐山は抗がふ事が出来なかつた。寧ろ刀を引く潮時を獲たのである。

『折角太夫の言葉ぢや、今夜は見逃して遣はず。早々此地を立ち去れ。』

『えゝまだ申すか。』

編笠武士が又踏み出さんとするのを、お袖は身を翻して、袴の前に取り纏つた。

『モウ勘忍して下さいまし。貴方も定めし御大切な御身體でムいませう。』

竊と編笠を覗くと上よりも見下す顔、其ふくらやかな下顎の軟か味は目に見覚えの肉附で有る。

お袖はハツと思ふと、全身の血が喜びの聲を擧げて、胸先に躍り狂つた、と同時に、お袖は突と立つて市川と佐山を見ると、二人ながら早七八間行きかけた。

『もし貴方、妾はお袖といふ賤しい稼業の女で御座いますが、どうやらお召物の裾にも泥汁が飛びました様子、拂つて差上げます程に、其家までお運びなすつて下さいまし。』

お袖の聲は必死にふるへて居た。二度とは側を離れまいとするので有る。

『然し拙者如き浪人者を案内して、御身の迷惑と相成つては心苦しい。』

『いへ其様な事は無いませぬ。縦令なりました處で、夫は好んでする妾の物好、自業自得でムイ  
ます。』  
手を執らんばかりに先へ立つので編笠武士は是非なく後に従つた。

\* \* \*

『太夫、只今の編笠武士は、誠に油断ならぬ曲者にムりますな。』

七八間行き過ぎた佐山は、只漫然と過ぎ去つたのではなく、酔つても本性を失はなかつた。

『貴公にも左様見ええたかな。』

市川は斜めに振向きながら、鷹揚に微笑を泛べた。

『太夫がお見えに相成る迄は、米搗蟲のやうに平詫まり致しながら、太夫のお姿を見ると、急に猛々  
しく相成りましてムります。本来ならば、手前一人ならば威張り申すも、太夫と伺へば、平身低頭  
致さねば相成りませぬ筈。』

『夫よりも貴公は危い處で有つたぞ。お袖によう禮を言はねばならぬのぢや。』

『何故にムりまするか。』

『彼者の身の構え、足の配り、武藝に於ては、容易ならぬ腕前で有る。お袖が邪魔を致さんなら、

彼奴は居合拔に、貴公を斬り捨たのぢや。』

佐山は今更に身ぶるひした。あの時斬られたらどうなつたらうと、自分が劍法の心得のなかつた丈、  
相手の腕前が見えなかつたのを、空恐ろしく思ひ出した。

『彼奴は貴公を斬つて、返す刀に拙者へ斬りかゝる積りで有つた。』

『恐ろしき曲者でムります。何故彼奴を御召捕に相成りませぬ。此邊には町方支配の同心者が居り  
まするに因つて、直に命じまするでムいませう。』

『いや、市川は遊所に於て、左様な野暴な事は致されぬ。夫こそ花見る人の長刀ぢや。』

『さればとて見すく曲者を。……お袖がどうやら彼奴を連れ参つたかと思はれまするが、誠に奇怪  
至極にムります。自體何人でムりませうか。』

『されば、何人とも存せぬが、我等に好意を持つ者ではないな。』

『天狗の殘黨、……乃至は。』

『ウム、乃至は。』と、市川は鸚鵡返しに言つた。彼の腹中にも其人を思ひ勞らつて居るので有る。

『無名の義人が、御城下へ入り込んだと申しまするが。』

『よもや其奴では有るまいが、然し油断は大敵ぢやぞ。』

無名の義人如何に大膽なればとて、城下の遊所へ立入り、鞘當の争鬪を起さうとは思はれぬのだ。

話しながら、二人が歩み行く彼方から、新規召抱への大川磯之進が、急ぎ足に來かゝつたが、市川と見て驚いて側へに小腰をかどめた。

「大川か、いづれへ参るのぢや。」

新規に抱へた家臣に、遊所歸りと見られるのは、重役の威嚴に關する心地がした。

「只今少々詮議の者がムりまして。」

大川が詮議をするのは、只の火附盜賊でない事は勿論だ。

「何か曲者を追ひ込んで参られたか。」と、佐山は側から尋ねた。

「左様でムります。どうやら無名の義人が、御城下へ入つたと言ふ事、目明しの者が途中まで尾けましたさうにムりまするが、見失ひましてムりまする。」

「其者は如何なる風態を致し居りましたかな。」

「夫が委しく相知れませぬと申すは、目明しの者も、自分が見たといふのではムりませぬので。」

「夫ならば大川氏、先刻一人の怪しき編笠武士を、お袖といふ藝妓が、植木屋へ連れ込み居つた。よもや其義人では有るまいが、一つ覺られぬやうに、様子を見ては如何でムる。義人では有るまいが天狗の殘黨かも知れぬと存する。其許御奉公始めの手功と相成るでムらう。」

\*

\*

\*

\*

「マア矢張貴方でムりましたかあ、お慕かしうムいます。」

お袖は顫へ聲になつて、見榮も外聞もなく編笠武士の膝に取絶つて嬉し泣きに咽んだ。

今迄面を包んで、人目から逃げ隠れた武士の、輝やくばかり颯爽たる美男の晴がましさか、狭い座敷を一杯に照した、よもやと思つた其人が、戀に焦れた無名の義人で、大賀で受けた彈疵の傷ましき襷れもなく、昔ながらの健やかさを見るばかりでなく、お袖は未だ曾て、立派な侍姿になつた義人に接した事はなかつたのだ、いつも瘦せさらばひたる雲水の法師姿だつたり、田舎の野良男だつたり、見る影もなく變装したのが、今日は堂々たる美服の侍姿で、優美な中に、狎れ親しみ難い威儀を具へて居たのだから、今更の如く恍惚となつて、自分の身體が下の方から糊のやうに蕩けて行きさうで有る。然し何等の變装もせず、大手を振つて、水戸城下へ乗込んで來た不敵の振舞に至つては、全身盡く膽で固めて居るのかと、其度胸が一層恐ろしくなつた。

「お袖殿、拙者も御身に逢はんが爲に、恁様に當所まで入り込んで参つたので御座る。」

「マア妾が此様な卑しい稼業をして居るを御承知で御座いましたか。」

お袖は思はず顔を赧らめた。男が我身を忘れて呉れなかつたのを知つて、天へも昇る嬉しさに咬り

立てられたけれども、夫と共に、此様な卑しい勤めの身となつて、身を汚すやうに思ひ做されはしまいかと思ふと、消えも入り度恥かしかつた。

「其事は鳴海といふ郡奉行の仲間源藏と申す者が、酒に酔ふて自慢半分の間はず語りを、圖らず側聽して、疾くに承知致しましたのぢや。拙者は大賀にて里見の爲に彈を受けましたが、幸ひに肉を突き抜けた丈で、骨に故障が有りませぬから、甚八の介抱によつて、程なく全治致しましたにより、姿を變へて下岡殿の行方をお尋ね申したのである。」

「アノ父は如何致しました。」

下から覗き込むやうに見あげると、義人は顔を見られるのが憂さうに、無地に横を向いた。

「定めしモウ此世には無い者と存じますけれど。」

お袖の目には、包むとすれど意地の悪い暗涙が、口惜しい程聞譯なく、湧くやうに込み上げて来る。父御には残念ながら。」

「エツ」と、お袖は覺悟の胸をこづかれた。而して義人の膝にかけた手が、いじらしく力を罩めて押へ附ける。お袖の心が、今どれ程奮え戦のいて居るかと言ふ事が、目に見るやうに義人に體得されるのが、一層切なかつた。

「大賀の下三里、宮園といふ川岸で里里の手勢に追迫られ、鐵砲の爲に落命されたと云ふ事を確かめ

ましたに因つて、其死骸を埋めた處に、心ばかりの石を建て、一遍の回向を手向け参つたのである。これも定まる運命、然し天朝の爲に義軍を起し、其爲に討死なされた事故、父御は反つて御本望で有りませぬやう。怒じ拙者の如く、いつも生甲斐もなく生き残りますよりは。」

「アレ何を仰しやいます。貴方がお亡りになすつて宜しいのですか。父の死んだのは是非も無いませぬ。ですが父が亡なつて、また貴方まで此世にお飽きなすつたとは。妾一人は後に生き残つて、マアどうなるので無いませう。」

「いや、拙者も無用に死にたいとは存ぜぬ。然し此度こそ、死なねばならぬのである。夫故貴女に一目逢ふて、此世のお別れを致し、夫より快く地獄の門へ向はふと存するのである。」

「地獄の門と仰しやるのは。」

話が大切の核心に觸れた時に、義人は急に身を踴めて、薄桃色に仄めたお袖の耳近く顔を寄せた、温かく濕つばい義人の息が、芳醇の横面に觸るのを、お袖は蕩ける思ひで快よく受け入れた。

\* \* \*

地獄の門とは、白い牙を剝ぐ死の魔の口へ、我身を逆しまに投込むのではないか、お袖は其一言を

聞いて、悲しくゾットした。

『お袖殿、我々義軍の苦心は、未來永劫報はれる時はムらぬ。村方は勞れ、働くべき人は亡び、此上戦を起して、上役人に手抗ひ致さうなどは、所詮及びも附かぬ事で、これこそ戦ひの罪には非ず、我々共不徳の致す處で、亡びたる人々に對し、生残りたる拙者は申譯がムらぬ。』

義人の聲には悲愴の響きが有つて、憂き人の優しい腸を寸断せんばかりで有る。

『其様な事は有りませぬ。何も彼も約束事。今に温かい春の風が吹くと、草や木が芽ぐみまします。』

『其草木を芽ぐませるのは、只一つの手段が有るばかり、拙者は其手段を執る事に極めましたにより必ずお止め下さるな。』

堅い決心の色が、眉宇の間に鮮かに描かれた。

『夫で此の水戸の城下へお忍びなすつたので、ムいしましたか。』

『如何にも、只一つ残された、最後の手段を用ゐる爲。』

其手段が容易ならぬ企てで、義人の一命に拘はる大事だと思ふと、お袖は堪へ情もなく、しなやかな身體がふるへて来る。

『もしか貴方は、御身體を懸けて、御城内へ斬り込みでもなさるお積りでは、ムいませんか。』

『吐ッ。』と。義人は目顔で押へた。

『此なる上は卑怯のやうなれど、奸黨の元兇を登して、災ひの根を断たねばなりません。』

『奸黨の元兇と言へば、市川三左衛門に山岡圖書なんぞで、ムいませう。』

『如何にも市川は諸生黨の權者、殊には當時政道を執る事で、市川有る中は水戸に勤王の旗の翻る望みはなく、遠く義公光圀様、近く烈公様勤王の思召しは、只畫がける餅と空しく相成る。然し市川を討つ時は、所在に潜む天狗勤王の面々も、始めて世に出る事が出来、従つて勤王の大義は再び薫る道理で、ムる。』

義人は最後の非常手段を用ゐる、奸黨の暗殺によつて、一か八かを決する外はないと信じた。お袖は頼む義人に、さうした危い道を踏ませ度はないが、勢ひ覺り力極まつた今は、此權道を履む外、狂瀾を回らす事は出来なかつた。

『お勇ましくございます。夫こそ天に代つて道を行ひ遊ばすので、神様も屹度お助け遊ばします。』

『御身も喜んで下さるか。』

必ず止められるとのみ思つたのが、意外にもお袖の同意を得たので、義人は千騎萬騎の味方を得た喜で有る。

『夫には丁度よい事が、ムいます。市川は折々忍び姿で此家へ歸散に來まして、妾を呼ぶので、ムいます。妾も勤めなればこそ、お酒の相手をしますけれど、女の力に協ふものならば、只一突にと思ふので、ムいませう。』

います。』

『只今喧嘩に事寄せ、實は市川を討たうと存じたのだが、先にも十分油断なき故、是非なく控えましたが、さう聞く上は、此處へ通ふ行き歸りを待つて、首尾よく志を遂げるでらう。』

『いへへ、妾が御手引を致します。其時こそは天晴見事に……夫までは貴君もお客になつて、妾を招んで下さいませ。妾が今厄介になつて居る太田屋佐吉といふのは、元妾の父に命を助けられた者、稼業こそは賤しうございますが、義の堅い者でございますから、之にも貴君の事を内々心得さして置ませう。』

二人が窃々話して居る時に、廊下には聞き分の無い泥酔のよろめく聲、夫を止めたり介抱したりする女中の聲に交つて、一團の騒がしき塊が、ドヤ／＼と廊下をうねつて来たが、アナヤといふ間もなく、よろ／＼とよろめいて、ドタリと障子を押付すと、泥酔は仰向けに座敷の中へ轉がり込んだが、起直ると同時に。

『ヤツ、和女はお袖だな。』

其胸間聲が大川磯之進だつたので、お袖は事の意外に冷りとした。

\*

\*

\*

\*

泥酔は眩を張り、目を据えて、お袖と義人とを等分に見比べつゝ、火のやうな息を吹き付けた。

『お袖、手前はよくも俺に黙つて、恠處で賤しい稼業をして居るな。夫といふも俺といふ亭主を棄て、流浪人の情夫に狂ひ居るからの自業自得だ。苟にも野上大盡と言はれた、下岡源太夫の娘が賤しい藝妓商賣、夫で先祖の顔を汚さぬと思ふのか、呆れた女だな。』

大聲で罵られて、お袖の顔は無念の怒に青白くなる迄に激した。

『大きな御世話です。妾は妾で勝手にして居る事。死んでも汝さんの御世話にならうと思やしませんよ。』

お袖はキチンと膝を合せて端坐したまゝ、邪慳に横を向き切つた。

『俺の世話にならぬと、俺は手前の亭主だ。』

『又始まつたよ。亭主／＼と、亭主を賣りに來やしまひし、妾やお汝さん見たいな意氣地無し、裏切者の内儀さんぢや有りません、お氣の毒様さ。』

思ふ様無慳に言ひ切つたが、思はずハツとよろめいた。裏切者／＼と、箸の上げ下しに言ふ時、側に居る義人の心を傷めやしまひかと、ハツとしたので有る。

『黙れ、愚圖／＼言へば、手前を役所へ引立てるぞ。』

『あゝ引立てるなら、引立てて御覽なさい。妾には後に光つて居る方が有るんですよ。』



『夫は誰だ。』

『誰でも無い御家老様さ。』

大川は出る鼻を透されて、危く宇宙に泳ぎかけた。後に附いて居るのは、側に居る義人だと思つたのに、案に相違して市川國老だと言はれては、喞の音も出ない。

『サア引立てるなら、見事引立てて行つておくんないよ。』

大川は側の男を、お袖が戀の的たる無名の義人に相違ないと睨んだのだ、然し滅多に捕り懸かつて、一人と一人の太刀討は、兎ても及ぶべくもなく、空しく取逃がした上に、自分が怪我もし、お袖にさせてもならぬと思つたので、何とかしてお袖を外さして置いて、夫から飛蒐らうと考へたのだ。酔つたと見せたは、此座敷へ轉がり込む手段に過ぎなかつた。

『御家老様を後楯に持ちながら、ゑたいの知らぬ男と、こんな狭い部屋でとち狂ふとは、猶更勘辨がならぬ。』

『誰が後援だらうと、間夫は勤めの憂さ晴しといふ事が有るぢや有りませんか。此方は妾の大切の方なんです、内處話がたんと有るんだから、颯々と出て行つておくんないよ。』

血相かへたお袖は、急に柔らく媚めいて、義人の膝にヤンワリともたれかかつた。

大川は此淫りがましい媚めきを見せ附けられ、胸は板となり、筋骨は鐵の如く鯨鋒張つた。有頂天

からは、黒煙が渦巻きさうにカン／＼といきり立つ。

『俺は御當家に仕官して、市中見廻りとなつたのだぞ。只の大川磯之進ではない。役筋の御用が有るから、俺と一緒に來なさい。』

立かかつて肩にかけようとする手を、義人は坐つた儘に軽くおさへた。

『コレ野暮な事をさつしやるな。お袖に用が有るなら、後の事にしたがよい。只今は拙者が遊興の席ぢや、御身のやうな野暮天に來られては、酒が旨くないによつて、とつと出て行つて貰ひたい。』

グイと手首を持ち上げられると、大川はイタ／＼と忙たゞしい頓狂聲を出した。手首がミリ／＼と碎けさうなので有る。

『ええ上役人に抵抗するか。』

口では強い事を言ふけれども、死命を制されて動きも取れなかつた。

『抵抗はせぬ。此處を出て行く道を教へて取らせるのぢや。』

猫のやうに首筋を釣るして、二階の欄干から眞直に庭へつるし下げた。

『ああこれ滅多な事をするな。』

泣かぬばかりの愁傷の側から、

『泉水の中へ棄ててお了ひなさいよ。』とお袖は邪慳な入れ智慧をする。

義人の爲に脅やかされた大川磯之進は、命かなく逃げ出したが、今に見る此怨みを晴らすからと思ふ心は、苛立たしく渦巻上り、忽ち配下の目明に耳打して十重二十重に植木屋を遠巻きさせ、蟻の這ひ出る餘地も無く、犇々と取詰めた。

「大川は鼠舞して逃げて参つたが、決して只では済ませぬであらう。拙者の身の上を大凡推量したに相違ないから、今の中に早く身を隠さうと存する。」

義人は直に立たんとした。大川は野上の會合の時に、法師姿の義人を見て居る。今と昔とは、似ても似つかぬ程違つては居るが、只往來の通りすがりではなく、お袖の側に居るのを見て、夫と思ひ出さぬ筈はないのだ。然し一時寸時もお袖は義人を離したくない心が胸一杯に取り詰めた。

「いいえ、反つて今お出なすつたら、途中に待ち伏して居るに知れて居ります。夫よりも妾の側においでなすつた方が、反つて安心でいます、大川は妾の側で手荒な事は出来ませぬ。又市川も妾の機嫌を損じまいとして居りますから。」

然しお袖の機嫌を取るが爲に、義人を庇ふとなつては、機嫌を取つた甲斐が無くなるので有る。「いや左様安心は致して居られまい。奸黨の奴輩は、拙者を召捕るが爲には、如何なる尊き値も拂ふ

者でゐるから。」

「夫なら一寸下へ行つて、様子を見て参りませう。」

お袖が裏梯子から降りて行くと、忽ち表口から、御用提灯を高く差上げて、ドヤ／＼と込み入る捕手の一隊。

「義人は何れに居る、取り逃せば曲事だぞ。」

口々に叫ぶを聞いて、お袖はハツと思ふと同時に、身を翻して梯子を駆け上つた。

「貴方早くお逃げ下さいまし。もう押かけて参りました。」

お袖は屹と身構へして、義人の刀を取つて渡した。堀川御所の夜討に、名妓靜が九郎判官の爲に鎧を投げかけ、刀を捧げたる花々しい意氣を見るが如くで有る。

「大方左様と存じた。然し拙者は間々生擒られる者ではゐらぬ。安心あれ。」

刀を取つて帯に差すや、袴の股立屹と取つて身構へした。

「妾が御案内致します。早く此裏窓から。」

不意の捕方の闖入に、階下では消魂しい金切聲が耳を劈くばかり、忽ちドタ／＼と梯子段を駆け上つて来る。

お袖は義人を後に圍つて、敵一人たりとも通さじと、狭い廊下を立塞いだ。

「御用だ、神妙に致せ。」

義人は後を振り返つたが忽ち身を躍らして隣の家根へヒラリと飛ぶ。

「夫逃げたぞ、外へ廻れ。」

大川は怒鳴り立てると共に、後を追つて窓際に走り近づかんとするのを、お袖は諸手をかけて突き飛ばした。

「え、理不盡な、何で妾の大切な人を召捕うとおしなさる。先刻の怯えが口惜しくつて、仇をしようとするんなら、一足だつても通しませんよ。」

お袖に突かれてよろめいた大川は、辛うじて立直つた。

「え、貴様は邪魔ばかり致す、彼男が無名の義人とは、此黒い目で睨んで置いたのだ。其處退かぬかッ。」

「い、へ違ひます、義人だの無名だのと飛んでもない。」

「えい邪魔だ。」

大川は敦固き立つて、お袖を押退けた、遮二無二裏窓へ取付くと隣の大家根を遙に走り行く男の姿が歴々と見える。

「夫油断すな。曲者は大家根に居るぞ、下りる所を搦め取れ。」

宵月斜めに掠める大家根には、意氣颯たる義人の英姿が、名人の筆で描き出され、下には提灯の火が降るやうに照されて、突棒、又股、梯子などの獲物が、右往左往に動揺した。捕物は空に聳ゆる大家根で有る。晴の舞臺の鮮かさは無名の義人の捕物にふさはしい光景だつた。

\*

\*

\*

\*

落月西に沈まんとして、光無き光は、斜に大家根を射削つて、威風凛々たる烈士の英姿を彩つて居る。遙か目の下の往還には、御用提灯が星と亂れて、右往左往に馳せ狂ひ、空聲かけて、屋上の人を脅やかさんとするけれども、誰有つて抽んで、梯子を登らうとする者はなかつた。

「早く下り口へ廻れ、長棹で足を拂へ。」

大川は植木屋の窓から半身を乗り出したが、誰も懸る者が無いと見ると畢生の勇を鼓し、身を躍らして大家根へ躍り出ようとして、窓の上へ這ひ上ると、後から覗ひ寄つたお袖は、其踵を取るなり、逆に捻つて突き飛ばすと、弾機を食つた大川は、呀と言つて轉がり落ちたが、夫でも隣の物干に掴まつて辛くも大地へ落るだけは免れた。

「助けてくれ〜。」

宙へ振下つて足をばた附かせる、夫と見ると捕方は義人の方を其方退けにして、大川を助けるに盡

力したので、義人は其際に大家根から次へくと、猫の如くに走り、忽ちにして姿を失つて了つた。  
『ええ取逃がして了つたか。早く出口々々を塞ぎ、家捜しを致せ。』

大川は眞赤になつて苛立つた。而して片手にお袖を引据ゑし、打殺しも仕兼まじき見暮だつた。

『貴様のお蔭で、折角網に入つた魚を取逃がして了つたぞ。貴様のやうな不届きの女は無いわ。』

『オヤ孰方が不届きなんでムいます。彼の方を無名の義人だなんぞと、貴方が勝手に當推量したんぢや有りませんか。貴方のお蔭で妾の大切な情夫を失して了つたんですよ。』

『汝、亭主の前で、まだ其様な事を言ふのか。』

『オヤ又亭主の賣物なんですか。』

『何を汝ツ。』

拳を固めて振上げると、お袖は態と身を摺り附けた。

『サアお打ちなさい、幾らでもお打ちなさい。妾の身軀は大金の懸かつた身體なんですから、どうか其積りで打つて下さいよ。』

相手がためらふ程、益々肉薄して行く。すると忽ち其後に聲が有つて

『お袖く、何と致したのぢや。大川御身は何かお袖を立腹させたのかな。』

後の障子を明けて、ヌツと入つて来たのは思ひもかけぬ市川三左衛門だつた。

『これは太夫様で。』

大川は吃驚敗亡、猫に會つた鼠のやうに縮み上る。

『何か知りませんけれど、此人が捕物を通して置いて、夫を妾の故にしなざるから、妾が詰め開きをして居たのでムいますよ。』

『捕物を通したと。夫は無念な事ぢやな。』

『恐れながら其捕物と申すは、無名の義人でムいます。』

『アレ、夫が間違ひなんですよ。』

忙てて止めようとするお袖を、市川は手直似で制しながら、

『無名の義人を取逃がして、何を愚圖く致し居る。早く手配を致さぬか。』

市川に叱り付けられて、大川は不服ながらも、是非なく退出する。其後妾を見送つた市川は、お袖の手を執つて引立てながら、

『其方は恠様な浮雲い處に居るものではない。此方へ參つて飲み直すと致さう。義人が此處へ立現はれたのを、義人に致すも、又只の客に見逃すのも、凡て乃公の胸に有るのぢや、お袖、乃公は當水戸家御領分を支配する身の上ぢや。人間一人半分の命を、生かすも殺すも、乃公の自由に在る。其方は左様に思はぬかな。』

意味ありさうな事を言つて、強いてお袖を彼方へ連れて行つた。

\*

\*

\*

\*

義人が首尾よく逃れ得たらうかと言ふ心配が、胸一杯に怒濤の如く躍り狂ふけれども、強て市川に手を執られては、流石に振拂ふ事もならなかつた、況して彼の口吻は、酸いも甘いも噛み分けたらしいので、没義道に楯を衝くのも反つて義人の爲になるまいと、お袖は詮方無く、別席へ導びかれた。外はどうやら静かになつて、捕方の騒ぎも聞えず、家の中も落附いたらしいので、騒動が外へ移つた事を推測された。若しも義人が召捕れたなら、尙一層ガヤ／＼罵しり騒がねばならぬのだ。然し手入と共に、首尾よく逃れ得たかと言ふ心配は、只ならぬ不安の脅えを以て、お袖の疲れ衰へた心を邪見に刺戟した。夫でも義人を信じ切るお袖は、大川如きに容易く押へられる人ではないと思つても、左様思ふ一方に、不斷の心配は消えなかつた。

『これお袖、今逃げ失せた其方の客人は何人だつたな。』

市川はお袖の手を持ち添へて我膝頭に媚めかしく置かせた。其軟かい手の温みを快く味はふ爲で有る。

『あれは通りがかりの方で御座います。先程佐山さんと、詰らない争鬭をお始めでございますから、

妾が此方へお連れ申したら、序にお酒を上ると言ひなされるので、仕方無くお相手をして居ただけでございますよ。』

『然し先刻物蔭で聞けば、其方の口から情夫だとか申したではないか。』

市川は歸ると見せて、いつの間にか戻つて居て、何も彼も聞いて居たので有る。

『大川さんが、あんまり執んどい事をお言ひですから、あお言つて追拂つたんでムいませすよ。』

お袖は兎も角も言ひ抜けるだけの逃路を見落さなかつた。

『左様で有つたか。其方も中々口巧者になつたな。習ふより馴れるで、野上の下岡の娘で有つたら、さう言つて大川を烟にまく事は出来なかつたであらうな。』

お袖は脳天から魂を引抜かれたやうに驚いた。よもや知るまいと思つた市川は、我身の素性を知り過ぎる程知つて居るので。

『マア、殿様は何を仰しやるんでムいませすよ。』

唇に手を當て、オホホと嬌冶に笑つた色氣は、嚙んでふくめるやうな味と、男の魂に縋り附くやうな媚めきとを持つて居た。

『其位の事を知らないで、一國の束ねが出来ると思ふのか。』

ボンと大きな手で、お袖の滑らかな肩先を打つた。お袖は其不愉快な感じが、胸の心から骨の髄ま

で沁み込んで行くやうに思はれる。

「其方が下岡の娘であれば、其方の情夫が何者かと言ふ事は、聞くも訊ねるも無い筈ではないか。」

お袖は意地をかむで、力めて平氣を粧ふ積では有るが、心地悪い膏汗が、冷たく生え際から流れて來ると、咽喉は涸れ舌は眞白に乾き切つた。

「夫では誰だと仰しやるのでムいます。」

お袖は言ひ負されるのが口惜しさに、一生懸命に打かつて行くと試みた。

「無名の義人が、此頃水戸へ姿を現はしたと言ふ事は、紛れもない事ぢや、して見れば、恚様を遊處へも參らぬ限りも有るまいがな。」

お袖は早鐘のやうな、胸の隆起の轟きを押へつつ、黙つて聞いて居る外なかつた。

「況して乃公が、此土地へ參る事を、義人が知つたにより、多分は自ら實否を探るが爲に參つた事であらうと思ふ。否、必ず參らねばならぬ道理ぢや。義人は此處へ參つて、欲しいと望む品が有るわ

So!

「オヤ其ん癡恐ろしい人なら、何が望みなんでムいませう。」

お袖は夫となく、市川の腹中を探つて見る積りだつた。

「乃公の首が欲しいからだ。」

お袖は精も根も、此時に盡きたかと思つた。義人の一期の望みを、市川は疾うに見抜いて居るので有る。

\*

\*

\*

\*

利かぬ氣のお袖の神身は、縮となる程、散々に踏みしだかれるばかり、脅やかされて了つた。

市川は亂次無く女の膝を枕にして陶然たる醉を吹いて居る時には、之が天狗一黨の命を奪ひ去つた奸黨の首領にして、鬼とも悪魔とも恐れられる人かと疑がはれるけれども、酒と女の爛熟した薫りに浸りながらも、心からの油断といふものは無く、お袖の素性も知つて居れば、義人が我身を狙ふ爲に、水戸へ入り込む事まで目で見ると知つて居るのだ。而して其敵の娘にも近寄り、命を狙ふ敵にも忙て騒がざる所に、彼の量り知られぬ大腹中が見える。

彼はお袖が始め寸法を量つたやうな小さい人物ではなく、流石に三十五萬石を束ねするだけには有ると思ふと、義人が助け無き單身で敵の本據へ乗込んだのは、薪を負ふて、火に近づくよりも危険で有つたと、お袖は絶え入るばかり、義人の恙ない事を、心密かに神佛に祈り上げる。

「お袖、無名の義人と名乗つて神佛の如く領分の農民共より仰がれ、千騎が百騎どころか、只一人となる迄、農民の爲に乃公共に楯衝かうとする志は、敵ながらも感服致すのぢや。農民共は之まで義

人の何人で有つたかを知らなんだが、大賀の騒動で、裏切者の下村紋十郎の子の次郎と知つて領分の  
 人氣は地に墜ちて了ふたのぢや。其處で自分の味方といふは自分一人外に助けが無いによつて、死物  
 狂で乃公の首を狙ひに參つて、死ぬか生きるか成るか成らぬか最後の山を張つたのぢや。敵ながら其  
 氣概は、誠に感心な者で有る況して帯刀とは言ひながら、僅に郷士の身分に過ぎぬのぢや。』  
 『夫では義人様を召捕つて、御所刑にする爲、御家中の方達、惣出で御捜しになつて入らつしやるの  
 ですね。』

『一時は義人を召捕る事に全力を擧げたのぢや。義人さへ無ければ久慈河筋に騒動は起らぬでな。然  
 し領分の農夫は最早力盡きて、再び起つ事は出来ぬのみか、誰も裏切者の下村紋十郎の子の指揮を  
 受けやうとは思はぬので、義人の今日の姿は、髭無き猫で、最早鼠を捕る事が出来ぬ。強い弓勢でも  
 其箭の力が末に及んで窮まる時には、半紙一枚破れぬ道理で有る、されば國の掟に背いた者を召捕る  
 のは當然で有るが、人物としては餘り惜き者なるにより、乃公の手心一つで、生かしても殺しも致され  
 るのぢや。』

餓えたる者の前に、珍珠佳肴を山と盛り上げ、箸を觸れさせんとして、危しく觸れさせぬ程むこた  
 らしい戯れだつた。

義人の命を助けて貰ふには、此人に絶る外無いと言ふ事を、つくづく感じさせた。お袖は生けみ殺

しみ責め苛なまれ、生身の胸を解剖されるやうに苦しみ悶えた。

『コレお袖野暮を申すやうだが、義人を助けると助けぬとは、誰の心に在るか考へて見たがよいぞ。』

『ハイ、夫は殿様のお心次第では無いませんか。』

『然し乃公に其心を起させるのは、其方の心次第なのぢや。』

『と仰しやいますと。』

『其様に諄く訊ねる事は無い。其方も馬鹿念を押す者だ。義人を助けんと思はゞ、乃公の言ふ通りに  
 致したらよい、但し義人を殺し其方も同類として、吉田ヶ原で淺ましい姿を曝さうと思へば、乃公は  
 此上何も申さぬ。縁の無い昔と諦めるより致し方はないのぢや。』

義人といふ囃をかけて、話は手詰のギリ／＼になつて來た。

『夫でも妾は、先日申しましたやうに、妾の身體といふものが。』

『女の用をせぬとあるか……其様な事は心配ないぞ。乃公は此齡になつて、其方に女の用をさせる爲  
 に、手活に致すのではない。』  
 お袖には一層市川の心が量られなくなる。

\*

\*

\*

\*

市川の言葉は、實に豫想外だつた。藝妓の色香に愛で、手活の花にしようとする者が、女の役に立たせやう爲ではないと言ふ。夫は餘りに空々しい口實ではないか、お袖は相手の眞意を疑つて、兎角の返事も出なかつた。

「恁申すと、其方は變に思ひ取るであらうが、乃公は其方を寵愛すると申せ、何も寝間の塵を拂へと申すのではない。乃公の家の中といふものは、誠に寂しい秋風が吹いて、年中骨立つた林を見るやうだに因つて、其方のやうな、軟かい春の花の粧ひを邊近くに眺め、春風の快い媚めきに乃公の心を柔げたいと思ふのぢや。乃公は其方の色香を愛でも、無慙に手折つて、閨の土産に致さうと申すのでは無いぞ。」

市川の言ふ處は、如何にも品がよく、流石に三十五萬石の束ねをする國老程は有つた。今の先義人を餌にして、お袖の悲しい心を慮たげようとした卑怯の様子は、藥にしたくも見えない。

「お袖實を申すと、乃公には其以前お玉と申す妾が有つたのぢや、之も色を漁る爲め召抱へたものでは無い、誠に不憫の身の上なるより乃公の左右の世話を致させ置いたのぢやが、乃公の奥なる者が格氣を致して、お玉に難面く當るのぢや、お玉は折柄妊娠中で有つたので、其心痛は一方ならぬ事であつたらうと存する。乃公も其捌きに困じて幸ひ江戸へ出府する公用が有つたので、後に心を残しながらも、反つた乃公の居らぬ方が奥の心を柔げる事もあらうかと、出立致して戻つて参つたのは二十一日

目ぢや、戻つて見ればお玉は居らぬ、何か氣に入りの仲間と駈落致したと申すのぢやが、お玉が其様な女で無い事は、能く存じて居るのぢや。内々様子を搜ると、奥の姦策の爲に、お玉は最早此世の人では無いらしい、乃公は不憫には存するが荒立ては我家から火事を出すやうなもので有る。夫れに因つて何事も胸に納めて置いたが、先日始めて其方を見た節、他人の空似とは言へ、お玉に生き寫したのぢや、之も何かの縁と存じ、其方の世話を致したいと思ひ附いたので有るぞ。」

豺狼の如き市川には、反つて温かき人間の情味が溢れて、弱い女の心に沁み込むで来る。

「段々とお話し、妾のやうな者を、夫程に思召して下さるのは、辱なうムいですが、妾がお世話を戴いたら、又お玉さんと仰しやるお方と、同じ憂目を見なければなりません。」

「いや、其頃と違ひ、奥は久しい間の病氣で、一切外へは出られぬに因つて、其方を下屋敷へ圍ふたとて、夫を知りもせねば、知つたとて、どうなるものでは無い。」

「夫では只妾を引かして下さつて奇麗薩張にして、御下屋敷へ置いて下さらうと仰しやるのでございませうか。」

「其方が一年でも二年でも、辛棒致して呉れさへすれば、其後は乃公が媒人を致して、戀ひ焦れる義人に添はして遣はさう。」

市川の言ふ事は餘りに旨過ぎる程の恩典で有る。お袖は義人の追捕を緩うするが爲には、一時其言



ふ通りになる外無いと諦めた。

「乃公の言ふ事ばかりでは、其方も安心なるまいに因つて、只今佐山を呼んで證據人と致すであらう其方を妾とは名のみで只座敷切の相手、一年の後には必ず義人に添はして遣はすぞ。」

市川の言ふ事が、或ひは女を欺く一時の方便かも知れないが、若し約束に背いて、淫らな事を仕掛るやうだつたら、色に事寄せて、市川を刺殺し、積る怨みを晴らす迄である。

是非に拘らず、義人の危急を救ふのは、市川の言葉に従ふ外はないのだ。

\*

\*

\*

\*

「あ、もし其處へお出の御方、少し待つて下さいまし。」

先へ行く侍姿の後から、バタ／＼と追つて来たのは、優しい女の憎い程媚めかしい聲音だつた。

「オウ、拙者に用事でゐるか。」

侍は極めて忍びやかに闇から闇を走り抜けるらしかつたが、夫でも呼び止められると、其上にも逃げ隠れやうとはせず、男らしく立駐つて、近づく人を持ち設けた。

音もなく流るる水は、常夜燈の灯を軟かく浮かべて、靜かに垂れる青柳の絲が凛々しい侍姿の上、傘となつて夜露を防ぐのも優しい。

「ハイ、今の先から、貴君の後を慕つて来た者でゐます。」

「さう言はれる御身は何人であられるな。」

「もしお忘れになりましたか。もし義人様、貴方は妾をお忘れでも、妾は貴方を忘れませんよ。」

「何と言はれるな。」

侍は胸先を扶り抜かれたやうな怖えが有つた。

「もし義人様、妾は源氏繪の阿辰でゐますよ。」

「ヤツ御身は阿辰殿で有つたか。」

執念の蛇のやうな阿辰に付き纏はれては、義人の辯口を以てしても逆も騙かした事出来ない。

「其阿辰殿が拙者に何の用事が有られるな。」

義人の眉には險惡な怒りが蠢きながら、夫でも没義道に叱り退けやうとはしなかつた。

「え、貴方は何處迄も空々しいではゐませんか。妾が貴君の後を、何の爲に追つて居るかと言ふ事が、よくお解り遊ばして居るぢやありませんか。」

阿辰は義人に摺り寄り寄りらばかりにして、側の捨石に腰をかけた。男の凛冽たる意氣に觸れて、遣る

瀬ない思ひを慰めたいのが、せめてもの心遣りで有る。

「御身が拙者の後を追ふのは、里見に頼まれて拙者を召捕る爲めではないか。夫れより外、御身は拙

者に用はない筈ぢや。』

『いいへ、夫れは餘まり情ないお言葉でございます。妾はお上からお頼まれしてゐる役目がございますから、それで貴君を捜さない事もございませぬが、それよりもモツトく、貴君にお目に懸らなければならぬ事があるのですよ。』

阿辰の美しき聲には、今を限りに高潮した媚めきが盛上つた。

『ハテ夫は如何なる事ぢや。』

『もし義人様、妾の心は能くお解りぢやムいませぬか。妾の切ない胸の苦しみを解いて下されば、妾は何で貴君を訴人したいなどと思ふものですか。』

『御身の胸の苦しみが、何で拙者に解るものであらう。拙者は醫者を致した事は無いのぢや。』

義人はお辰を瞰下して氷より冷やかな笑ひを浮べた。お袖を欺いて川竹の流れに沈め、其身の代を奪ひたる残忍酷薄の非道な振舞を義人はお袖より聞いて知つて居るけれども、此處でお辰に天誅を加へなどしたら、世を忍ぶ身の、自ら縛を受くるの愚に落ると、ムヅ／＼する腕を扼して、苛立しく堪へた。

『アレ、妾の言ふ事を茶化して逃げようとなさるのでムいませぬか。もし貴方、妾は悪女の深情、一度思ひ込んだならば、嫌はれやうが、邪魔にされやうが、どうしても思ひを遂げなまやならないんで

ムいますよ。見込まれたが因果と諦めて、妾の言ふ事を聞き入れて下さいませしよ。』

義人は目を閉ぢて天を仰いだ。阿辰はジツと其横顔を見詰めて、一撃一笑だも見落すまじとする。一

\* \* \*

意地の女の深情は、理が非でも思ひ込んだ男を、温かい内懐中のぬくめ鳥に抱へ込んで了はうとするので有る。自分程の縹緞を以て誘ふ水をとろ／＼に向けたならば、落ち懸らぬ男はないと信じて居るのだ。

然し無名の義人は、怨み重なる阿辰が、幾ら甘言を以て誘つたからが、浮いた情熱に温められて、心を迷はす者ではない。

『折角だが阿辰殿、拙者は今其様な浮いた事を考へる暇はないのぢや。』

義人の返事は阿辰の期待を裏切過ぎる程、そつて無く薩張したもので有つた。

『妾がこれ程迄に言つて居るのに。』

阿辰の顔には、無念の嬌嗔が、電光の如く閃き過ぎた。

『拙者は今迄役人の爲に追はれて、狩場の兎のやうに逃げ廻つて居るのぢや、色だの戀だのいふ暢氣した氣持にはなれまいでは無いか。夫よりも此首が大切なのぢや。』

「だから、妾の言ふ事を聞いておくんなされば、貴方のお命は請合ますよ、幾ら御上の人、貴方を召捕らうとしたつて、妾が側に附いて居れば、指も指せるものでは有りませんのさ。」  
「御身が捕方役人と言ふでは無し、其様な勝手が通るものではない。」

「いゝへ通りますとも。」

阿辰は齒切よくキツパリと言つて退けた。

「其代り貴方がどうでも妾の言ふ事を聞いておくんなさらなけりや、妾だつて意地です、人我に憂ければ、我又人に憂しと言ふぢや有りませんか。貴方を御領分から外へ逃すものでは有りませんよ。」

「御身が美事拙者を召捕るといふのかな。」

寧ろ嘲笑するやうに、鼻の先で笑つた。

「妾が召捕なくとも、妾が指しさへしたら、御領分の草も木も、残らずお捕方となるので御座んす。貴方はお召捕になつて吉田ヶ原で首を曝しても、勤王がなると思つて居なさるのかへ。」

義人の急所を衝いて、どうでも口説き落さねばならない。

「黙れ。」と義人は俄然として怒鳴り附けた。阿辰も嚇と激發されて反抗の勝氣がムラ／＼と渦巻く。

「拙者は命惜さに、女の憐れみを買はうとする者ではない。拙者が召捕れるものなれば、美事召捕つて見なさい。」

「貴方は妾一人だと思つて、馬鹿にしておいでだらうが、妾が此處で相圖をしたら、捕方衆は地の底から湧いて出で、天から降つて来るのでムんすよ。」

義人は夫を恐れるのでは無いが、女の執念には殆ど疲らされた。

「阿辰殿、御身の志は、又逢ふ時まで預けると致し、此處は笑つて別れようではないか。」

「笑つて別れるなら、今夜貴方の行く處まで、妾も一緒に行きまじやう。」

「然し拙者は行き當りバツタリ、眠くなれば路傍へも臥すので、宿といふものは無いのぢや。」

「夫こそ草を敷き寝の假枕、粹な事ぢや有りませんか。」

何と言つても、阿辰は放れようとしな。此女を斬つて逃れるは容易いけれども、義人は取るにも足らぬ女の血を、男の魂の業物に嘔るに忍びないのだ。

此時義人の行衛を捜しあぐねて居た大川磯之進は、廻り廻つて此處へ來合せたが、男と女が川端柳の下に媚めかしく寄り添ふのを見て、物陰から覗くと、男は思ひ設けぬ義人だつたから、ハツと思ふと共に、女はお袖でなくばならぬと思ひ込んだ。

大川の頭に閃いたものは、義人がお袖を連れ出して、遠く逃げ走るのだと考へると、忽ち遣る瀬なき嫉妬の火炎が、黒煙を立て、目も眩むばかりに燃出づる。

「汝ツ、お袖を逃がしてなるものか。」

大川はギリ／＼と齒を噛み鳴らし、怒の手は思はず知らず、帯刀の柄にかゝつた。

燃ゆる嫉妬の怒りは、大川を驅つて、夜叉とも悪魔とも化せしめた。

所詮我物とならぬお袖は、義人に生ぬるい魂をこすり付けるに非ざれば、國老市川殿に、玉と輝く五體を、弄びにされるので有る。何れにしても、我物ならぬお袖なれば、殺して煩惱の苦悶から免れる外はない。

大川の目には、阿辰が義人に言ひ寄つて居る形が、お袖と義人と離れ難なき異體同身の玄妙の嘖きと映じたのだ。

「貴方は、どうしても御自分はお上の手にかゝらないと思つて居なさるけれど、彼方にも荒神様が附いて居るんですから、お繩にならないとは言へませんよ。」

阿辰は又側へ寄つて行つた。彼女の右手には、何時しか明晃々たる刃が隠されて居たのだ。嫌ひ抜かれた今となつて、戀も情もない。義人の油断を見澄して一刀の下に刺し殺し、手功を一人で占めようと考へたので有る。

「召捕の役人は、夫で扶持を貰つて居るに因つて、美事召捕も致さう。拙者は又、手を束ねて縛られ

るが嫌さに、天に翔けり地に隠るゝ迄ぢや。」

「貴方位依估地な方は有りません。もう一度考へ直しては下さいませんか。」

「どう考へ直すのぢや。」

「妾に貴方を引けさして下さいまし。」

阿辰は此場になつても、まだ未練が有る。

「折角ながら、キツパリとお断り申す。」

阿辰はもう之までと思つて、突と義人の袖に縋ると見せて、不意に刺し殺さうと意氣組むだ。

脇から疑ひの目を以て、暗の中で見ると、二つの身體が、完全に一つになつたやうなのだ。

「己れツ」と、夢中に激した大川は暗中の物蔭より躍り出ると共に、曳ツと言つて斬り下す刃の光、ハツと義人が身を退ると同時に、呀と魂消る女の叫び、肩先深く斬り下げられながら、利かぬ氣の阿辰は右手に隠した刃を共儘、振り向き様に、大川の脾腹目蒐けて、拳も徹れと刺し貫ぬいた。大川は危急の傷手に、夢中になつて阿辰の鬚を握り、阿辰は大川に獅嘴附いた儘、呻めき苦しみつゝ、折重なつて其場へ倒れた。

義人に取つては、不慮の騒動が天の與へて有る。

「オウ御身達は飛んだ同志討を致したな。夫こそ天罰が廻り來たのぢや。」

義人は早繰松に火をつけて、藻掻き苦しむ二人の手負の上を照した。炎々たる火光に映じ出される敵味方三人の顔は、闇の中に描くが如く浮き出した。

「オウお袖ではなかつたか。」

大川は痛恨に堪へやらぬ悲愴な眼を睜つた。

「汝は大川さん。人違ひで妾を斬つたんだね。」

死から藻掻き出んとする美人の必死の苦しみは、鬼氣人に迫るばかり、身の毛も彌立つ程だつた。

「阿辰殿、どうやら人違ひで斬られたらしいが、誰を怨まんやうもない、皆自ら招いたのぢや。御身の冥福は、必ず拙者が弔ふによつて、心残さず成佛されるが宜しい。又大川殿も間違ひとは言ひながら心の迷ひから人を斬つて、掌返さず其場で討たれる、之も因縁事であらう。殊に御身は義軍に加

擔しながら、中途に裏切つたが爲に美名を残さず汚名を残す、然し美名も人間といふものが此世に無ければ、残りも止まりもするものではない、譽も毀りも人間の間のみ、天より見る時は、只

昇殿に等しいで御座らう。左様思ふて安心して眠られるがよい。遅かれ早かれ拙者も同じ道に参る者ぢや、其節世に在りし時の笑ひ話でも致さうでは御座らぬか。」

手負が動かなくなると、義人も消えるやうに闇の中に吸込まれた。

静かに暮の、仙波沼を見渡す寮の門には、見越の松の翠濃く、媚めく情が畫にかゝれさうに甘く彩られる。  
久しく空家になつて居た市川の下屋敷は、美しい主人を得て、俄に色深く、明るいやうな光が映じて来た。

\* \* \*

大きな三つ輪髷の舐めて拭いたやうに美しいお袖は、新に浴みを出て身じまひを済まし、廊下傳ひに座敷へ来て見ると、主人市川と客とが、窃々語らふ聲が聞こえる。

「太夫、誠に意外千萬に相成りました。京表の沙汰と申しますものは、何事でござりませうか。上様に於かせられまして、將軍家御辭退に相成るとか申します事で。」

夫が里見立三の聲なる事は明かに解つた。

獵犬の如くに義人を追廻し、勤王義烈の天狗一黨や久慈川筋の義軍を目の敵きにして召捕り、血の河を流す程に、罪無き人を斬つた彼は、假令自ら手を下さずとも、父源太夫をさへ殺したので有る。

恚う思ふと、お袖の軟かい胸は俄に炒り附くやうになつて、身中がジリ／＼と燃えて来た。

「いや其取沙汰は聞かぬでも無いが、然し恚様な節には、種々の風説も起るものぢや、忙てる事もあ

るまゝ。』

口には事もなげに言ふけれども天下の形勢が日に傾いて來た事を、市川は里見より先に能く知つて居たから、此五六日は寮へも顔を見せず、殆んど城内に詰め切つて、一味の者と額を惱まして居たので有る。

天狗勤王の一まきを殆んど餘類無き迄に根を断ち葉を枯らしたので有るから、萬々一天朝の御代となつた時に、下されねばならぬ咎めの、如何なる殘虐なもので有るかと言ふ事は、諸生黨の人々の身ぶるひする處だつた。

『夫に就いては、豫て其方に申付けて置いたお玉の事じやが、彼れはまだ知れぬか。』

市川はお玉といふ妾に、よく／＼思ひ人つて居たので、お袖を名義だけの妾に召抱たのも、お玉に佛が似てゐた爲だつた。

『だん／＼調べまして△いましたけどどうもお玉様は、お亡りになつたらしう△いますので。』

『證據が有つたか。』

『左様で△います。一昨年四月二十六日、那珂郡大宮から西に、伊勢畑といふ處が△ります、夫を越えます峠で、道中の女が慘たらしく斬られて蟲の息で居ましたのを、土地の者が介抱致しました處女は臨月であつたと見えまして、不思議に玉のやうな男の子を生み落とした儘締切れましたさうで

△ります。其女といふが、どうもお玉様に似たやうに△りますし、又殺した下手人が、どうやら彼佐山半六に似て居るので御座ります。』

お袖は息を殺して、必死の高潮を胸に昂まらして聞いて居た。

『然らば佐山奴は、奥に頼まれて左様な無慚な事を致したのぢやな。』

殘忍冷酷の市川も、目のあたり我身に泌みる痛恨を思ふと、胸板を掻き破られるばかりに苛立たしくなる。

『して其生れた子供といふのは其後如何致したのぢや。』

『其節旅の雲水がござりまして幸ひ其場へ來合せましたので、懇に讀經を致してくれた趣き、尙右の旅僧は、お玉様より、最期の遺言を聞き取られた由で、其子といふのも、旅僧が行く／＼弟子にして天下の名僧大知識にも仕上ると言ふて袖に抱いて立去りましたといふ事でござりまする。』

『其僧は何處の者か知れぬか。』

『松島瑞巖寺の雲水といふ事でござりました。尤も瑞巖寺より雲水に出で居りまするは、二百人もござりませうが。』

『然らばお玉は全く世にない者と極つたのぢやな。』

吻と溜息を吐く時、後の襖は静々と開いた。

「いゝへ、此處に一人居るのをお忘れになつたんですか。」  
お袖の輝やく姿が、鬨の處にスツクと現はれた。

\*

\*

\*

\*

鬨の中に一步踏み入れて、スツクと立つた儘美しい女の晴がましい誇を以て、屹と見下したお袖の顔を見ると、里見は呀と言つて忙つてふためいた。

市川の國老が、新に寵妾を抱へられたといふ事は、チラツと聞かぬではなかつたが、漸く水戸へ歸つて来たばかりなので、其女が野上小町のお袖であらうとは、夢にも思ひ設けなかつたのだ。

「里見さん、能く来て下さいました。妾は貴方に逢ひ度つて、仕方がなかつたんですよ。」  
聲が甲走つて居るのに、其心の穩かならぬのが、早くも首肯される。

「貴女は野上の下岡さんの御娘御では入つしやいませんか。」  
里見は襟ばゆくなつて、何とも附かぬ挨拶をする。

「ハイ、貴方に殺された下岡源太夫の娘お袖ですよ。」  
お袖はビタリと市川の側に坐つた。

「いへ以ての外で手前は下岡殿を殺害した覚えはムりませぬ。」

「今更其慶事をお言ひなさるのは卑怯ですよ。貴方も役目でなすつた事なら何もお隠しなさるにや當らないぢやムいませんか。御家老の市川の殿様の御世話になつて居る妾の親を殺したからつて、夫はお役目でなすつたんですもの、只妾の伺ひたいと思ふのは、父が何處でどういふ風に殺されたか夫を聞かして下さいませぬ。」

底に針を持つ皮肉な言葉は、狼狽た彼の胸を息の根の止まる程チクリ／＼と刺して来る。里見は相手が太夫の愛妾であるだけ、何と答へていゝか忙つて、へドモドした。

「まだ夫ばかりぢやございませぬ。殿様が折角忘れて居なさるお玉さんとか言ふ方の話を持ち出して妾の御寵愛を、一時でも減らして下さいさる御親切、妾はきつと御禮を申しますよ。」

お袖は何も彼も聞いて居たので有る、市川も少しテレれば、里見は冷汗を流して、穴の中へも消え入りたい程だつた。

「お袖、マア其様な事を申すな。里見も悪氣が有るのではない。」  
市川は是非なく里見の爲めに言ひ解うとした。

「オヤ、何で言つちやならないんです。丁度好い折なんですから、妾に言はして下さいませぬ。」  
市川なぞを物の數ともせぬ見暮に、里見は益々驚き忙つた。此調子では何を市川に吹込わか知れたものでは無い。

「ねえ里見さん、貴君は御役目でなすつたんでせう。だけど妾といふ者の方には、數へても數へ切れない程、積る恨みが有るんですよ。……いへへ、妾ばかりでは有りませんが、御領分の人達は、貴君といふ者を怨んで、生きながら貴君の肉を食べても、まだ嫌らないと思つて居るんですよ。」

怨みに汚れるお袖の悲痛な怒りを、市川さへも止める事が出来ないので、里見は逃げるにも逃げられず、苦い顔をして、窮屈さうに燈み上つた。如何に女に甘いとしても、市川程の人が、妾の頭を押へる事が出来ぬかと思ふと、里見は匙を投げて逃げ出す外はない。

「妾の父は貴君に殺されました。而して貴君は義人さんの阿母さんを殺しました、其上に義人さんの兄さんを。……夫から大賀では、卑怯にも飛び道具で、義人さんを射つたぢや有りませんか。然も妾の見て居る前で。……彼の義人さんといふ者は、天にも地にも易へられない、妾の大切な方なんです。其人の一家一族に祟りをする貴君ですもの、妾に怨まずには居られないんですよ。」

「夫はお袖様間違つて居ます。飛んでも無い事で、太夫様にお聞きなすつてもお解りになりますけれど。」

「いへへ、妾は殿様にだつて怨みはあるんですよ。」

愈々出で、愈々憚らぬお袖の意氣に、市川も里見も、顔見合せて額の汗を拭ふばかりだが、お袖は言ふ丈を言はねば氣が濟まなかつた。

「もし里見さん、お汝さんは妾が市川の旦那に恐れ入つて居ると思ふか知らないけれど、妾は皆が殺されたり、苦しめられたりした事を思ふと、義理にも仰せ御尤もで承はつちや居られないんですよ。夫だのに妾が恚うして居るのは不思議だと思ふか知らないけれど、義人さんを見逃して、指も指さないと云ふ約束で、此寮へ来て居るのさ。だから汝さんが、此上にも義人さんを召捕らうなど、すりや妾が承知しない、殿様だつて何だつて、妾にや見界が無いんだから、其積りで居ておくんなさいよ。」

秘密の約束を素破抜かれて、市川はへドモドと忙てた。下役に對して、國老の權威は微塵も失なつて了ふ。

「里見さん、汝さんは役目で咎人を召捕るとお言ひだが、汝さんのする事は、態々咎人を拵へさして夫を片つ端から捕まへようとするのぢや無いか、妾が恚う言ふ身になつたのも、元はと言へば、汝さんの妾の阿辰と云ふ悪魔彼人が妾を騙して、藝妓とか遊女とかに賣つたからぢや有りませんか、汝さんは立派な御役人で有ながら、妾とグルになつて、人買女囮をして、其身代金を着服して居るんぢや有りませんか。」

「あゝ飛んでも無い事で、夫は阿辰が行つた事で、手前は少とも存じません。」



里見は膏汗を拭いて、ゼイ／＼息を切つた。

「こんな人を御本丸で抱てお置きになると、御上の首へ繩を付け兼ねないですよ。もし殿様、愚圖愚圖せずと、早く御暇をやつてお了ひなさいな。」

蟲も殺さぬ野上の小町娘が、人を人がましくも思はぬ爬羅搔に一變して、積る怨みを里見に復さうとするのは、毒を以て毒を制し、奸物に因つて奸物を制さうとするので有る。

「お袖様、夫には種々行違ひが有ります。貴女様の事などは全く手前は夢にも知らないのです、どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。」

「今迄妾は弱い者で、汝さんから苛められ通して居ましたよ。だけど羊が獅子になつたんで、もう汝さんなんぞに負けちや居ないから、汝さんが勝つか、妾が勝つか死につくらをしやうぢや有りませんか。」

お袖は言ふだけの事をいふと、物すごい凄婉な笑ひを泛べて、さも／＼溜飲が下つたと言はぬばかりに、平身低頭する里見を瞰下した。

下々の士民に對しては、目の下の罪人を扱ふが如き里見は、上役に會つては、猫の鼠のやうに縮み上るので、市川の機嫌を圖り兼ね、覺束なく逃げ出して了つた。

然し太夫の目の前で、彼丈の我儘氣儘を仕盡すお袖の事であるから、如何なる無理も道理に、横車

を押し兼ねないとする女に甘い太夫を動かして、自分を扶持の食ひ上げとするかも知れず、夫もよいとして、勤役中の失策を數へて、切腹か縛首に仰せ附けぬものでも無いと思ふと、俄に居たゝまらぬ程、不安な魔えを感じた。

假令山岡圖書や津端七右衛門の如き重役に絶つた處で、市川の鶴の一聲を動かす事は出来ぬのだから、此上は市川の本宅へ行つて、奥方を誑のかし、燃る嫉妬の怒りを煽つて、お袖、太夫から遠避ける外、助かつて行く道はないと考へたので、翌る日の夕刻、機嫌聞きを兼ね、上市の太夫の屋敷へと出向いた。舌三寸の動かし工合で奥方を黒焦するのには、里見に取つて困難な業ではなかつた。

\* \* \*

「里見よう知らして呉ました。妾は市川が寮へ參るのを、種々内密の相談事で、眞面目な寄合に行くとはかり思つて居ましたが。先年のお玉の事にも懲ず、又しても、其様な女を召抱へるとは、何といふ呆れた人で有りませう。苟にも主人筋に當る妾と言ふ者を有るか無いかにして。」

里見の陰險な舌刀は、忽ち効果を現はして妻女お市殿を火の如く煽り附けた。水戸殿分家の妾腹の姫で、家來へ養女に遣はされたのが、血統を洗へば主筋の絲を引くので、お市殿の傲ぶつた威勢は、良人市川を凌ぎ、日頃でさへ手も附けられぬので有るから、良人が妾を抱へたと聞けば自分の權威

を傷つけられたものとして、毒煙をまくし立てつつ、狂人のやうにいきり立つのだ。

「其お袖と申すのは、只今も申し上げたやうに、謀叛人の娘でムいますから、何時殿様の首を覗はぬとも限りませんやうな譯で。」

「市川が首を討たれるとて、夫は自業自得と言ふものです。」

里見の舌刀は危く外れさうになつた。奥方の怒りは、良人を大切と思ふのでは無く、只自分の女の誇を汚されまい爲である。

「夫のみではムいせん。お袖は奥方様の事を、嫉妬深い夜叉のやうな女だによつて、自分の事を知られたなら定めし地団駄踏んで口惜しがらであらうが、油臭い屋敷者では、逆立しても追附くものではないなぞと、出入の町人などに話して居りますさうで。」

奥方の胸には、五色の火の玉が燃えて、身體中を駈廻るばかりに惱亂した。

「どうも怪しからん女で有ります。其様な者を抱へて置きましたは、市川は兎に角、此家の汚れとなりますよ。」

「左様でムいますとも。之は何とか致さねば相成りませぬ。」

「妾が参つて、市川の前で、二人列べて置いてたしなめて遣はしたら、どのやうなもので有りましたやう。」

「其が宜しうムいます。陰では奥方の事を種々に申しましても、面と向つては、奥方の御威光に恐れをなして、一縮みに縮み上つて了ひます。」

里見は奥方お市殿をそそのかして、お袖の頭を押へ、市川の氣隨を制さなければ、何時扶持を召上げられるか解らぬので有る。

「市川は今日も寮へ参つて居ませうか、妾は之から出向きます。里見其方も一緒に参つて呉れたがよろ。」

「宜しうムいます。早速御案内申上げます。」

乗物は直に用意された、折柄逢ふ魔が時の寂しい松並木を、嫉妬の火炎を包んだ駕籠は飛ぶが如くに走り行く。

駕籠脇には供の女中と若黨との二人、殿を承はつて、濠端を七八丁も下つて來た時、突然闇の中より躍り出た一人の男が、大手を擴げて駕籠の行手を塞いだ。

「汝ツ、狼藉者ツ。」

若黨が突き退けんとすると、敵は無言の儘、指で芋殻を弾くやうに、若黨を投げ飛ばして了つた。

「狼藉者見損つたか、之は太夫様奥方の御乗物だぞ。」

里見は一刀の鞘を拂つて躍り出した。

「此處構はずと、早く〜。」

陸尺は横に反れて、一散に飛んで行く。相手も左まで駕に用は無いと見えて、強がち追ひ止めやうともせず、烈しく斬り込む里見の刀を無手で遣り違はせながら。

「里見、貴様に逢はふと思ふて、此處に待ち受けて居つたのぢや。」

颯と覆面を拐ぐり棄ると、夜目にも鮮かな美男の輝き。

「やあ貴様は無名の義人。」

頭から冷水を浴せられたやうに驚き慌てる時、義人は怒りを啣みながら、顔に會心の笑ひを湛へた。

\*

\*

\*

\*

近頃の物騒沙汰に、宵乍ら寂しく沈み果たる濠端の松並木、梟の聲より外、耳に入るもの無い程森閑として、森羅萬象の凡てが死滅し盡したやうに、地の底へでも引入られる。人通りは物かは、犬の影さへ見えない。

此救ひを絶えたる夜に、鬼神と恐れられる義人と、眞向を突附けた上に、乗物の人は、嫉妬に身を擲いて、後に恚うした大事が有るとは夢にも思はず、矢の如くに飛去つて了つたので有る。

里見は捕方役人の司として、咎人召捕の腕には丈で居るけれども、其咎人と一騎討の勝負に至つては因より勝目が無いのみならず相手が義人と有つては、さらぬだに其名に聞き怖ぢして肝魂も身に添はなかつた。

然し彼も聞こゆる召捕方では有るし、上の扶持を戴く者が、狩場の兎の如く追詰めた義人に出逢つて、汚なくも背を見せて逃げ走るべくもない。

「オウ大膽不敵のお尋ね者、自ら名乗つて出るとは神妙の至りぢや。謹しんでお繩を受けい。」

附元氣の勇氣を鼓して、無二無三に打かかりながら、死物狂ひの聲を振り立て。

「無名の義人だぞ、出會へ〜。」懐の呼子の笛を取出してピリ〜〜ツと一所懸命に吹き立てた幸ひ町廻りの者が聞き附けて、救ひに来てくれれば、思はぬ拾ひ物をするので有る。

悲愴な呼び子の音色が電光の如く闇を劈くかと思ふと、忽ちバタバタと眞一文字に駆付ける足音が聞こえた。

「オウ早く来い、無名の義人を召捕れば莫大の恩賞だぞ。」

「何、無名の義人だと。」

闇中より躍り出た大男は、鈍重な聲で應じたが、忽ち里見の後より襟首と帯際とを取つて、目よりも高く差上げた。其怪力に驚きながらも、里見は兩足を虚空にバタ付かせながら、

「人違ひだく。」と聲を限りに叫び慌てた。

「何が人違ひなもんだ。汝こそ里見立三だ。汝の爲に散々酷い目を見た俺は、四度瀧の甚八だぞ。」  
言ふかと思ふと馬鹿力で聞こえた甚八は、一振振つて鐵板の如き大地へ微塵になれと叩き附けた。無双の怪力を以て、十四五貫の大の男を叩き附たので有るから、大地も窪むばかりに打ち當つて、

さしもの里見も呟と言つたぎり、手足をビク／＼して、蟲の息になつて了つた。

「態ア見ろ、散々地方の者を苦しめた報いは此通だ。これでもまた義人様に仇をするか。」

土足を擧げて、力任せに踏み附けると、胸板も肋骨も、ミリ／＼と碎けさうになつたが、反つて一時の氣附けとなり、里見は聊か正氣づいた。

「甚八もうよい。あまり苦しませるな。」

「うんにや、此奴の指を一本づつ挫し折つて、身體を肉醬にしなけりや大勢の人が浮ばれましねへ。」

容易に聞き入れさうも無い甚八を押退けて、義人は里見の耳の根に囁いた。

「里見、悪は終に天の咎めを受け浅ましき身の終りを遂げるのは是非ない事ぢや。拙者の親なる紋太

夫も誤つて義軍に裏切り、同志を汝に召捕せたが爲に、終には雪の中で狂ひ死をしてすふた。又汝と

共に悪を扶けた源氏繪の阿辰も、裏切者の大川磯之進と同士討して二人ながら無慚に死んで了ふた。其

次は汝ぢや、己れの罪が己れに報いたのぢや、多くの人を損ひ、天朝の不爲を圖つた者に末遂げた例は

ないぞ。見ろ汝の頭分なる市川も天命窮したるによつて其破滅は目前である。只一刻速いと遅いと

相違で落行く道は罪の報いの冷たい流れの中ぢや。」

側で聞く甚八はもどかしがつて

「恁麼奴に念佛聞かせるよりは、一思ひに叩き潰して了ひますだ。」

義人は笑ひを啣みながら、左手を延べて、甚八の無法を遮つた。

\* \* \*

「何ですつて、奥様が來たんだつて。夫がどうしたと言ふ事さ、妾は奥様だつて、何様だつて、少とも恐いんぢや有りませんよ。」

少し酔つて居るお袖は、淫りがましい女の薫りを爛熟させつつ、市川の身體に、横の方から靠かかつた。其柔かい肌ざわりを、迷惑な快さを以て、市川は軽く押退けやうとしながら、思ひ切つて押す力がなかつた。

「マア妾が參りましたといふのに、この女に出迎ひもさせず、どうなすつた事でムいます。」

お市殿は眼を角立てて束々として來た儘、淫がましい有様に、流石に立竦む外なかつた。

「オウ其方は何で恁様な處へ參つたのぢや。」

市川は脇の下の冷汗を氣味悪く拭きながら、辛うじてお袖から離れる事が出来た。平生は側へ寄りさうにもせぬのに、此時に限つてお市殿の嫉妬の怒りを煽り立てるやうに、媚めかしい嬌態を見せびらかす。夫が市川には難有いやうな情なさである。

「和女がお袖といふ女でありますか。殿様を誑らかして居るといふ。」  
お袖は之を聞くと、フムと鼻の先で笑つた。身を捨鉢に奥方に腹立たせれば、嫌でも市川が暇を出さねばならぬから、さうすると義人の搜索も打切られ、自分も元の古巣へ、自由に戻られると、賢しく目算を立てたのである。

「貴女が奥方であらうしやるんですか、始めてお目に掛りました。一體殿様を誑らかすとはどういふ事が出来ます。」

相手の火の手が、益々昂まらねばならぬやうに空嘯く。  
「和女は白々しい女だ。和女が居るばかりに殿様は此方へ入り浸りで、御上の御用も遅れ勝になるのでは無いか。」

「オヤ、冗談ぢや有りませんよ。妾が殿様に此方へ来て下さいと願つた事は只の一度も有りません殿様の方から遮二無二妾を引かせて、此處へ圍つてお置きなさんちや有りませんか。妾は殿様を何とも思やしないのに、殿様の方から勝手に惚ておくんなさんちですよ。」

女として言はふやうなき圖葉抜けた高言に、お市殿はブルブル顫へたけれども、流石に高貴の出で有るから、夫に言ひ勝つ言葉を持たなかつた。妾手懸などいふものは、奥方の前には一言もなく縮み上り、お玉のやうに口答へ一つされぬものとのみ信じて居たのが、案外抵抗もし兼まじき勢ひに聊か勝手が違つた心地になる。

「ねへ奥様、文句が有るなら、妾に言はずと、殿様に言つて下さいな。」  
お市殿は氣を焦つて唇が戦なき、全身を強い痙攣がしめ附けるやうに感じながら、良人の前に膝を突き附けんばかりに坐つた。

「貴君は立派な御身分で有りなが、此様な賤しい下賤女に魂を奪はれるとは何事でムいます。今妾の見る前で、暇をやつてお了ひなさい。」  
市川は咽喉へ短刀を突き附けられ、其切先が薄皮の上に觸れんとするばかりに迫つて居るので、身動きもされずに苦しく唸つた。

「マア少し落着いてくれ。」  
「落着くも落着かぬも有りません。此様な女に懸り合つて居なさればこそ、無名の義人とかいふ悪者が、水戸へ入つたと知れながら、未だに御召捕にならないのでは有りませんか。」  
「成らない筈ですよ。」と、お袖はオホ、と笑つた。

「義人さんを召捕ないと言ふ約束で、妾が此方へ来て居るんですもの。召捕れてたまるもんですか。」  
「マア貴君は」

お市殿は呆れて良人の顔を見詰めた。其秘密を素破抜かれて、市川は身體が冷汗で解ける程息苦しく疊の目へも潜り込みたかつた。

「夫には仔細の有る事だ。義人は水戸といふ大きな牢の中から、外へは出さないやうにして有るのぢや。」

苦しい言譯をする處へ、次の間に力強い足音が有つて、ドヤ／＼と立現はれた。其眞つ先なのは、お袖が寝た間も忘れぬ無名の義人下村次郎の、意氣颯爽たる姿であつた。

\*

\*

\*

\*

單身敵の牙城へ飛込むにも等しき大膽不敵の振舞に、お袖も冷りとすれば市川もお市殿も頓へ上らんばかりに驚いた。

市川と義人との隔たりは、僅に疊二枚を餘すばかり、市川が百萬の軍兵を擁すにしても、三尺の刀の下で義人から免れる途はないのだ。

「突然御寛ぎの席へ參上致したる段はお許し下されるやう。……拙者は其許始め役人一同より追はれ

居る無名の義人、誠は下村次郎と申す者でゐる。今日虎威を犯して推參致したるは、拙者が自ら名乗つて出て、繩を受けんか爲めではなく、其許に繩打たんが爲でゐる。」

思ひ切つた義人の言葉に、市川夫婦が呆れ惑へば、お袖さへ狐につままれた心地がして、互に義人の顔を見詰めた。

「何と申す。乃公を召捕ると、白痴た夢を見て居るのぢや。」  
「いや左様ではムらぬ。拙者の後には、見らるる通り、捕り方の者が控へ居りますぞ。」

夫がいづれも市川の影にも驚き脅えた小役人で、顔を見知る人々で有つたから、反つて夢では無いかと驚いた。

「此の通り、其許召捕りの下知状を中納言様より頂戴致し居るのぢや。此度將軍家は征夷大將軍の職を返上致され、天下は京都御所の直々の御支配と相成つた。御政治向萬端御一新と相成つたに就ては當水戸家に於ても御改革に相成り、從來の重職方の支配向に就いて、一應お取糺し有る旨にて御分家少將殿が、御本丸へ乗込まれたのでゐる、其許と拙者共とは私の怨みはなく、只勤王佐幕の趣意の相違より睨み合と相成つたに過ぎぬのでゐるから、之より御本丸へ參つて、御申開きに相成れば仔細はない事と存じ申す、既に山岡圖書殿も御本丸へ登城致され、諸役人は孰れも勤王專一たるべく誓ひを立てたによつて、以後御構ひはないとの事でゐる。」

禮儀を正した言葉に、市川は酒の酔も醒め果、お市殿は齒の根も合はぬばかりにワナ／＼した。

「お憎しみのかかつた里見立三は生擒にすべき筈でムつたが、誤つて打殺し申した、不憫ながら、之も天罰が來つたものでムらう。」

お市殿は途中に駕籠を支へた者の有つたのは知つたが、夫が反つて義人だつたとは夢にも知らなかつたので、今更及ばぬ嫉妬に焦立つて、良人の危難を救ふ事の出来なかつたのを悔むだ。

「拙者の申す處を疑はしく思はれなば念の爲めに彼を見られよ。」

義人が廊下の障子を明け放すと、生垣の外を取まく無数の提灯が、晝より明かに點し列るのみか、四度瀧の甚八は驚破と言はば飛び蒐る構へで、何時の間にか庭先に控て居た。

勤王方の一網打盡の計畫は、疾風迅雷の如く、秘密の底に編み出されたので、本丸の内外相應して一舉に事を起したのだから、奸黨方は殆んど寝耳に水だつた。

「之も運の末と思はれよ。近き例が結城寅壽殿でムらう、江戸老中方と申合せて、水戸に威光を振廻されたるも、事破れて凶はれになりたる節、其従容自若たる有様は、敵も味方も、未だに敬服致し居るではムらぬか、其許も結城殿の流れを酌むで、水戸三十五萬石を支配致されたのでムるから、願はくば水戸武士の魂を辱めぬやう。夫に就いて、其許安心の爲にお見せ申す者がムる。」  
後を向いて手を舉げると、何時の間にか甚八が三歳ばかりの一人の男の子を抱いて來た。

「市川殿、此小兒にお見覚えが御座るか、之こそ其許の御息で御座るぞ。」

「いたい氣の小兒は、手を舉げ足を動かして面白さうに笑つて居た。」

「夫が拙者の子供とは。」

「其許が愛妾お玉殿といふに生せられた大切のお胤で御座るぞ。」

衝激の上にも衝激を受けて、市川は啞然として目を睜るばかりだつた。

\*

\*

\*

\*

「市川殿定めし思ひかけぬ事でムらうが、其許の愛妾お玉殿と云ふは貞節の女で有つたが、奥方の嫉みにより一時其許より身を退かれたが、懐胎と聞いて奥方の怒は強く、お玉殿を腹の子諸共亡き者と爲されよう企てがムつた。」

ジロリりとお市殿を見ると、眞赤になつて俯向いて居た、義人の言ふ事の偽ならぬは奥方の舉動にも首肯される。

「一昨年四月二十六日野も山も若葉の翠が、快よい色を浮かべる時でムつた、拙者は捕方の爲めに追はれて、其若葉の戦ぎにも魂を驚かし乍ら、大宮より伊勢畑へと雲水の旅僧に身を襲して、人目を避けて通行した時でムる。山中にて土地の樵夫が頻りに騒ぎ罵るによつて偶と、立寄つて見ると、美しい

女が肩先を斬られて呻き苦しむ様子、尤も輕傷ではゐつたが、其節の驚きの爲かして出産致したは男の子でゐつた。夫より女に問ひ糺した處、市川殿其許の妾にしてお玉と云ふ者、佐山半六といふ者に欺かれ、奥方の嫉みによつて、此の山中で斬られたので有るが、圖らず人の姿を見たによつて佐山は逃げ失せたと云ふ事で、お玉殿も程なく息を引き取られたにより、拙者は東西知らぬ嬰兒が不憫と存じ、袖に抱き取つて知己の許へ預け置いたのが此の子でゐる。他日親子の對面を致させ度いと存じたが、圖すも此の場で拙者の宿望を遂げらる事は喜ばしい。就いては其許の裁決が如何やう相成るとも、此の子は拙者が守育て、家名の立つやう致すにより御安神あつて宜しうゐる。」

義人の義は畢生の敵に對しても一掬の情を惜む者ではなかつた。

其首に重賞をかけて召捕らんとする人の子をも、危急の際に救ひ取つて育くみ育てる雅量は、到底並大抵の人の出来る事ではない、夫を思ふと流石の市川も始めて心から熱い感謝に潤はされた。

「恐れ入つたる御芳志御禮の申しやうゐらぬ。拙者は其許の首を規ひ、其許は拙者の子を助る、夫こそ誠の武士道にして、拙者などの及ぶ處ではゐらぬ。只今迄拙者行ひ來りたる道は皆天に忝らひたる邪道と存する、之より少將殿にお目に懸り一切の罪を負ふでゐらう。後々は武士の情で宜しく御取計ひを願ひたい。但し此場に於て一言御意を得たいのは之なるお袖の事でゐる。拙者は表向妾として召抱へてはゐるが、全くは一度たりとも枕席に待らした事はゐらぬ。之のみ其許への面目でゐる。實は亡

きお玉に似て居るによつて、心床せに召抱へるなど申したが、誠を申せば其許を誑き寄せる爲の囃鳥でゐつた。」

「アレ夫では義人様を助けるといふ約束は。」と、お袖はハツトした。

「夫は其方を欺く一時の方便で有つたが、天は人の偽りを許したまはぬのぢや……。もう何も申してくるな。凡ては夢の浮世ぢや。」

お袖は今更悲しくなつて、其處へ打伏すと、お市殿も弱い女の心になつて泣き沈むだ。

流石に奸黨の頭領は、自ら手を後に廻はして、いざと促し立てる。

「コレ、繩をかけるでは無い。駕籠にて御送り申せ。」

市川が立つて行くのを、悲痛な心を以つて、人々は見送つた。お袖は今更氣抜けがしたやうになつて其處へベツタリと坐り込んで了ふ。

「お袖殿、最早拙者は晴天白日の身でゐる。近く京表へ登らねばならぬによつて、取敢ず母と兄との墓參を致し瑞たき御一新を地下の人に告げねば相成らぬ。御身も父御の墓參を致されるがよい。拙者が御同道致すでゐらう。」

「あゝ嬉しうゐいます。妾はあんまり嬉しくつて夢ではないかと思ひます。」

義人と烈女とは思はず手を取り交はした儘、其手が一生粘附いて放れない事を、心から探ゆく祈つた。



覆面の義人 終

昭和九年十一月廿五日印刷  
昭和九年十一月卅日發行

覆面の義人  
定價金壹圓八拾錢

著者 前田 曙 山

發行者 萩原 一 男  
東京市神田區神保町一丁目卅五番地

印刷者 岩見 雄 司  
東京市神田區猿樂町二丁目十三番地



東京市神田區神保町一丁目卅五番地

發行所 萩原 星 文 館

振替東京六〇七九三番  
電話神田三〇三八番

前田曙山先生の二大名著

痛烈鬼神を泣かすむべき義人の活躍は本書の最終頁に於て知らず／＼耽讀し來たる讀者の好奇心を癒すことが出来る。

幕末覆面の義人

◆大好評

四六判五百餘頁上製  
定價 金壹圓八拾錢

送料十四錢

怪奇にして任侠神出鬼没なる俠盜は忽然として江戸の天地に現れた自由の變裝無數の行動殆んど端睨すべからざる者が有つた、然も彼と對峙して艶麗花讀者をして恍惚境に酣醉せしむ。

黒髮夜叉(前後合本)

◆大好評

四六判八百餘頁上製  
定價 金貳圓也

送料廿二錢

發兌 東京市神田區神保町 星文館  
振替東京六〇七九三番

終

